

# まことのささげもの

——ローマ奉献文中の一節 *Quam oblationem* の  
理解に寄せて——

西 脇 純

## はじめに

「神よ、これを祝福し、受け入れ、まことのささげものにしてください。わたしたちのためにあなたの最愛の子、主イエス・キリストの御からだと御血になりますように。」 現行ローマ奉献文（第一奉献文）は、制定報告（制定の叙述）の直前に、*Quam oblationem* の語で始まるこの祈りを置いている<sup>1)</sup>。本稿は、この祈りの一節が辿った形態上の変化、およびその背景となった聖餐観の変遷を、主に R. Meßner の研究に依拠しつつ概観するものである<sup>2)</sup>。その際特に、J. A. Jungmann がこの一節の「基調」とも呼んだ *oblatio rationabilis* という表現に注目する<sup>3)</sup>。それは、東方典礼においても *λογικὴ θυσία* として知られるこの表現のうちに、この祈願文の本来の意図（起草当時の古代教会の奉献観）が明らかにされていると思われるからである。「*rationabilis* なささげもの」とは何か。本稿はこの点の理解にも努めたい。最後に、古代教会の奉献観と現行の形態および理解との隔たりを指摘して稿を結ぶ。

## 1. *Quam oblationem* の伝承史

### 1.1. 『デ・サクラメンティス』から『グレゴリウス・ハドリアヌス秘跡書』まで

*Quam oblationem* が辿った伝承過程は、R. Meßner によればおおむね次の4段階にまとめられる<sup>4)</sup>。

この祈願文の知られる限り最古の形態は、4世紀のミラノ司教アンブロシウス（†397年）の秘義教話録『デ・サクラメンティス』に見られる。これは同司教の新受洗者への秘義教話が速記者の筆記録のまま伝えられたもので、このため、当時は機密と見なされ公刊されることのなかった奉献文が削除を免れて収められている。アンブロシウスが引用するのは現行ローマ奉献文ならば *Quam oblationem*（神よ、これを祝福し、受け入れ……）から制定報告 *Qui pridie*（主イエスは受難の夜……）を経て *Supplices*（全能の神よ、つつしんでお願いいたします……）に相当する部分までである。『デ・サクラメンティス』に引用される奉献文がローマ奉献文の伝承史中どの位置を占めるのかは明らかではない。おそらく相互に影響を及ぼし合いながら並行して発展していったものと思われる<sup>5)</sup>。*Quam oblationem* に相当する部分は次の通りである。

*Fac nobis (inquit) hanc oblationem scriptam, rationabilem, acceptabilem, quod est figura corporis et sanguinis domini nostri Iesu Christi. Qui pridie. . .*<sup>6)</sup>

この祈願文は、前半部でささげものが神に受け入れられるにふさわしく「*scriptam, rationabilem, acceptabilem*なもの」とされること、またそのようなものとして神に受納されることを願い、続く関係詞 *quod* 以下の後半部で、このささげものがキリストのからだと血の「かたどり *figura*」であることを説明的に述べている<sup>7)</sup>。古代異教ローマの祈りの習慣にならない叙述的に用いられる形容詞を連続して配して(*scriptam, rationabilem, acceptabilem*) 受納の法的有効性を強調し<sup>8)</sup>、最後の *Christi* の語の後にさらに関係代名詞 *qui* を繋げ制定報告への橋渡しをする。したがってこの関係代名詞 *qui* によって、制定報告は、先行する「*Fac nobis*」以下のささげものの受納を願う祈りに従属する構造となっている<sup>9)</sup>。

『デ・サクラメンティス』に続く第2段階は、9世紀後半トレドで筆写

された古スペイン典礼のミサ典礼書写本(Cod. Toledo 35. 4)所収の「Post pridie」というタイプの祈願文中に出る。この写本は、おそらく5世紀以降ローマからスペインに流布したいわゆる libelli(冊子)にその前身があるものと推測される<sup>10)</sup>。K. Gamber は、この典礼書が7世紀後半のトレド司教ユリアーヌス(†690)の下で編纂された可能性があるとしている<sup>11)</sup>。『デ・サクラメンティス』が(Fac nobis で始まる)祈願文 Quam oblationem を制定報告の前に置くのに対し、古スペイン典礼からの例はこれを制定報告の後に置いている。

(Memorare etiam, quesumus, domine, famulorum tuorum,) quorum oblationem benedictam, ratam, rationabilemque facere digneris, que est imago et similitudo corporis et sanguinis Iesu Christi filii tui domini ac redemptoris nostri.<sup>12)</sup>

ここでは『デ・サクラメンティス』中の3つの形容詞 scriptam, rationabilem, acceptabilem のうち rationabilem のみが受け継がれ、これに新たに benedictam, ratam の2語が加わる組み合わせとなっている。また、『デ・サクラメンティス』の figura も imago et similitudo となっている。しかし前半部と後半部が関係詞(ここでは que)で連結されている点は『デ・サクラメンティス』と変わらない。

次の第3段階を示す例は古ガリア典礼、古ケルト典礼およびアンブロシウス典礼の史料に出る。R. Meßner はここで4つのミサ典礼書写本の校訂を試み、これを(古ケルト典礼およびアンブロシウス典礼の特徴を示す)「ローマ奉獻文のアイランドおよびアンブロシウ斯的校訂版」として紹介する<sup>13)</sup>。しかし彼の依拠する4写本間には若干ながら見逃せない相違箇所がある。ここではそれら4写本を全て並記したい。

『ミサーレ・フランコールム』(Roma, Vat. Reg. lat. 257, 古ガリア

典礼, 8世紀中期)

Quam oblationem tu, deus, in omnibus, quaesumus, benedictam, ascriptam, ratam, rationabilem acceptabilemque facere dignare: quae nobis corpus et sanguis fiat dilectissimi filii tui domini autem dei nostri Iesu Christi. Qui pridie. . .<sup>14)</sup>

『ボッピオ・ミサ典礼書』(Paris, Bibl. Nat. lat. 13246, 古ガリア典礼, 8世紀)

+Quam oblatione te deus in omnibus quesumus benedictam + adscriptam + ratam rationabilem acceptabilemque facere digneris quae nobis + corpus + et sanguis fiat dilectissimi filii tui domini autem dei nostri iesu christi qui pridie. . .<sup>15)</sup>

『ストウイ・ミサ典礼書』(Dublin, Library of the Royal Irish Academy, D. II. 3, 古ケルト典礼, 792年以降)

Quam oblationem té d [eu] s i [n] omnib [us] quesum [us] benedicta [m] + ascripta [m] rata [m] rationabilem acceptabilemq [ue] facere dignareq [ue] nobis corp [us] et sanguis fiat dilectissimi fili tui d [omi] ni n [ostr] i ie [s] u chr [ist] i qui pridie. . .<sup>16)</sup>

『ピアスカ秘跡書』(Milano, Biblioteca Ambrosiana, A 24 bis inf. アンブロシウス典礼, 10世紀)

Quam oblationem quam pietati tue offerimus tu deus in omnibus quaesumus + Benedictam + Adscriptam + Ratam rationabilem acceptabilemque facere digneris: Quae nobis corpus et sanguis fiat dilectissimi filii tui domini autem dei nostri Iesu Christi. Qui pridie. . .<sup>17)</sup>

この時点で祈願文は前半部後半部とも若干の変化をこうむる。前半部では形容詞の数がそれまでの3から5に増えている。ただし *benedictam* を頭に置く配置順序は4写本とも同じで、この時点ですでに配列が固定化していたことがうかがわれる。B. Botte はこの形容詞の配列について、最初の *benedictam*, *adscriptam*, *ratam* の3つが連結辞省略のまま列挙され、ささげものへの神のはたらきかけを描写する形容詞句を形成し、残る *rationabilem* が連結辞-que を伴う *acceptabilem* と結びつき、神のはたらきかけを受けた状態を描写する他の形容詞句をつくっていると分析する<sup>18)</sup>。後半部は、関係詞 *quae(que)* で始まる構造は保持されているものの、「かたどり、すがた (*figura; imago et similitudo*)」の語が消失し、キリストのからだと血への変化を直接先取りする内容に変わっている。それまで「主イエス・キリストの御からだと御血のかたどり [すがた] であるこのささげもの (*quod [que] est figura [imago et similitudo] corporis et sanguinis domini*)」と叙述にとどまっていた副文が、この段階で「わたしたちのために主イエス・キリストの御からだと御血となるこのささげもの (*quae nobis corporis et sanguis fiat dilectissimi filii tui . . .*)」と、ささげものの変化にアクセントを置くようになるのである。また、ささげものうえに十字架のしるしをするようにとの指示 (+) を書き込むミサ典礼書も登場する。これは、8世紀以降、奉献文のうち「いつくしみ深い父よ (*Te igitur*)」以下が小声で唱えられるようになったのとはほぼ並行して、おじぎなどとともに奉献文に導入されるようになった司式司祭の典礼動作である<sup>19)</sup>。十字架のしるしは、キリストの十字架上の奉献の秘跡的現在化、ささげものの祝福を意味した他、ささげものへ注意を集中させる、祈願文のうちの重要な語句を際だたせるなどの意図もあった<sup>20)</sup>。『ボッピオ・ミサ典礼書』は *Quam oblatione, adscriptam, ratam, corpus, et sanguis* の前に5つ、『ストウィ・ミサ典礼書』は *ascripta [m]* の前に1つ、『ビアスカ秘跡書』は *benedictam, adscriptam, ratam* の前に3つ、それぞれ十字架のしるしの指示を置いている。

次の第4段階で *Quam oblationem* は『古ゲラジウス秘跡書』と『グレゴリウス・ハドリアヌス秘跡書』に見られるような最終形態を整えるに至る。『古ゲラジウス秘跡書』は750年頃パリ近郊シェル (Chelles) の女子修道院で筆写された1つの写本 (Vat. Reg. lat. 316) に収められている。全体としてはローマの伝統の色合いが濃いのが、古ガリア典礼の特徴を示す式文をも含んでいる (ローマ市街区聖堂での司式を担当した司祭用の冊子 [libelli] が7世紀ころ編纂されたものを基とするという説もある<sup>21)</sup>)。一方の『グレゴリウス・ハドリアヌス秘跡書』は、一部教皇グレゴリウス1世 (在位 590-604年) にさかのぼるものをも含む種々の典礼文の集成を、7世紀後半から8世紀前半の間に教皇のローマの集会指定聖堂での司式用に再編纂した、いわゆる教皇秘跡書が基となっているといわれる。この写し一部を教皇ハドリアヌス1世 (在位 772-795年) がカール大帝 (在位 784-791年) の要請に応じてアーヘンに送り、これが各地に広まった。原本は現存せず、複数の写本の校訂により復元されたものであるが、主要写本は9世紀に集中している<sup>22)</sup>。 *Quam oblationem* については『グレゴリウス・ハドリアヌス秘跡書』に見られる5つの十字架のしるしの指示<sup>23)</sup> を除き両秘跡書間に文体上の相違はない。

*Quam oblationem tu deus in omnibus quaesumus + benedictam +  
adscriptam + ratam rationabilem acceptabilemque facere digneris,  
ut nobis + corpus et + sanguis fiat dilectissimi filii tui domini dei  
nostri iesu christi.*<sup>24)</sup> *Qui pridie . . .*

第3段階との相違は、祈願文の前半部と後半部を結んでいた関係代名詞 *quae* (*que*) が接続詞 *ut* に取って代わられている一点に尽きよう。それまで関係代名詞 *quae* によりかろうじて前半部の説明句としての性格を保っていた後半部が、この段階で (文法的には依然として前半部に従属しつつも) ささげものがキリストのからだと血に変化することを直接願う祈願文

へと（「わたしたちのために [……] キリストの御からだと御血になりますように」）、あるいは奉獻の目的がささげもののキリストのからだと血への変化にあることを明確に述べる目的文へと（「わたしたちのために [……] キリストの御からだと御血になるように [このささげものを……としてください]」）変貌を遂げている<sup>25)</sup>。

以上、4世紀後半から9世紀にかけての史料に基づき *Quam oblationem* の形態史を概観した。これにより、祈願文前半部の *figura, imago et similitudo* といったいわば「しるし」用語が伝承の過程で消失し、それとはほぼ並行するかのようになり、後半部の副文が「*quae est*」型から「*quae fiat*」型を経て「*ut fiat*」型へと姿を変えていったことが明らかになった。それでは、これら文言の変化が物語るところは何か。前半部後半部の変化の間に何かつながりはあるのか。また、祈願文の形態上の変化の背後にどのような思潮の変化を看取することができるのだろうか。

## 1.2. 受納を願う祈りから変化を願う祈りへ

R. Meßnerによると、古代教会は、プラトン主義的表象観(*Bilddenken*)の影響下のもと、ラテン語ならば *figura, imago, similitudo* にあたる「しるし」用語（順にギリシア語の *ἀντίτυπος, εἰκών, ὁμοίωμα* に相当する）を、聖餐におけるキリストの現存をいきいきと仲介するものとして理解していた<sup>26)</sup>。しるし（対型 *Bild*）は復活秘義の現実（原型 *Urbild*）の写しであり、その意味では祝われる現実にすでに参画しているものと見なされた。（日用のものとは別に）特に神のみ前に置かれたパンとぶどう酒を通して、栄光あるキリストの復活のからだに与ることができると信じられたのである。キリストの救済のわざは、「しるし」を通して——したがっていわば「不在」をも取り込んだかたちで——今ここで祝われる聖餐のうちにありありと「現在」すると考えられたからである<sup>27)</sup>。

例えば4世紀のツムイス司教セラピオン(†362以降)のものとされる『エウコロギオン』は、他の種々の祈願文とともにミサ奉獻文をも収めている

が、このうちローマ奉献文ならば *Quam oblationem* と制定報告とに相当する部分は次のような表現をとっている。

[感謝の賛歌に引き続き]

11. 天も地もあなたの大きいなる栄光で満たされています。ちからの主よ。このささげものをも (*θυσίαν*) あなたのちからと関与で満たしてください。なぜなら (*γὰρ*) わたしたちはこの生けるささげもの、この無血のささげものを (*προσφορὰν*) あなたにささげたからです。

12. わたしたちはあなたにこのパン、[あなたの]御ひとり子の御からだのすがた (*ὁμοίωμα*) をささげました。このパンは聖なる御からだのすがたです。なぜなら (*ὅτι*) 主イエス・キリストは渡されるその夜、パンを取りこれを割きこれを弟子たちに与えて仰せになったからです。「取って食べなさい。これはあなたがたの罪のゆるしのために割かれるわたしのからだである。」[……]

14. わたしたちは杯、御血のすがた (*ὁμοίωμα*) をもささげました。なぜなら (*ὅτι*) 主イエス・キリストは食事の終わりに杯を取り弟子たちに仰せになったからです。「取って飲みなさい。これは新しい契約、これはあなたがたの罪のゆるしのために流される私の血である。」ですからわたしたちは杯をもささげ、血のすがたを遂行いたしました<sup>28)</sup>。

この典礼文は、教会が奉献する「すがた (*ὁμοίωμα*)」のうちに、祝われる現実、すなわち「御ひとり子の御からだ」「聖なる御からだ」「御血」が映し出されることを述べている。すがたは奉献という典礼行為に支えられており、かつ祝われる現実がそこで明らかになるところの相 (*Erscheinungsbild*) でもある。そしてこのすがたにおけるキリスト秘義の現在を根拠づけるために、『エウコロギオン』の奉献文は因由の接続詞「*ὅτι* (なぜなら)」を繋げ、引き続き制定報告を引用するのである<sup>30)</sup>。

さて、ラテン語式文 *Quam oblationem* の最古の形態がアンブロシウス



の『デ・サクラメンティス』に出ることはすでに述べたが、それではアンブロシウス自身は彼が自ら引用する奉献文中の「figura (かたどり)」の語をどのように理解していただろうか。上に述べたような古代の表象観(Bilddenken)の枠内でとらえていただろうか。V. Saxer は、アンブロシウスが『デ・サクラメンティス』で奉献文引用中の他は figura をほぼ型の論理の「予型 (typus)」の意味で用いることに注目する<sup>31)</sup>。例えば「洪水(創6, 12-9, 17; 1ペト3, 20-21)」(Sac. 1, 6, 23; 2, 1, 1)「葦の海(出14; 1コリ10, 1-2. 11)」(Sac. 1, 6, 20)「ナアマンのヨルダン川沐浴(2列王5, 1-14)」(Sac. 2, 3, 8)「ペトザタの池(ヨハ5, 7)」(Sac. 2, 2, 5)などの旧約新約の出来事が洗礼の figura であると述べる。この figura はその対型(入信の典礼)とともに(入信に始まる)教会生活という第3の現実を開示する役割を担う<sup>32)</sup>。これに対し figura が聖餐のささげものを指す意味で使われるのは奉献文引用中に出る1回のみである。したがってこの figura corporis et sanguinis の表現はアンブロシウス自身の用語というよりは、むしろ彼が受け取った典礼伝承に属するものと考えられる<sup>33)</sup>。

一方興味深いことに、アンブロシウスは他の作品中2回 transfigurare の語を「ささげものがキリストの肉と血とに変わる」という意味で用いている<sup>34)</sup>。V. Saxer は、他にも mutare, consecratio の語を知るアンブロシウスがあえてこの用語を使うのは、『デ・サクラメンティス』で彼が引用した典礼文の権威によって、すなわち奉献文中の figura corporis et sanguinis の表現を用いて、ささげものの変化という信仰内容を表現するためであったと考える<sup>35)</sup>。したがって、アンブロシウスが transfigurare の語を奉献文中の figura から示唆を得て用いたとするならば、ささげものの figura が他の(キリストの肉と血の) figura に移行する(transfigurare)という表現は、『エウコロギオン』の奉献文のように「すがた(ὁμοίωμα)」そのもののうちに祝われる秘義が映し出されるといった表象観とはいささか距離があると言わざるを得ない<sup>36)</sup>。

すでにアンブロシウスにも見られるこの小さな亀裂は、その後ますます

拡がってゆくことになる。R. Meßnerによると、カロリング期以降のゲルマン・フランク的、肉体、物質的な思考構造が、古代の象徴観の中で培われた聖餐理解を受け入れ難いものにしていったという。古代、現実(Urbild)への橋渡しをしていたしるし(Bild)は、しるしの表示的な解釈(Signifikationshermeneutik)によって現実から遮断され、単に現実を示唆するサインにすぎなくなっていたのである<sup>37)</sup>。このような分断は、例えば、790年カール大帝の命を受けた宮廷神学者らにより、第二ニカイヤ公会議(786-787年、聖画像崇敬の復興を決議)に対する答書として作成されたいわゆる『カロリング文書』に顕著にあらわれる<sup>38)</sup>。聖餐の秘義をしるしと同格に置くことは彼らにとっては耐え難いことであった。

というのも、主の御血と御からだの秘義(mysterium)はもはや像(imago)と呼ばれるべきではなく、むしろ真実(veritas)であり、影ではなくからだ、来たるべきものの予型(exemplar)ではなく予型により前もってかたどられていたところのもの[そのもの]だからである<sup>40)</sup>。

聖餐におけるキリストのからだと血は「単なる」しるし、像ではなく、歴史のイエスの肉と血でなければならなかったのである<sup>41)</sup>。こうして西方神学者たちは、自ら理解したしるし観に満足できないまま、次第に、キリスト自身が「わたしのからだ、わたしの血」と言明する制定報告へと、関心を傾けてゆくことになる。

このようなメンタリティーのなかで、制定報告直前に置かれた *Quam oblationem* の文体にも変更が加えられることになったと R. Meßner は推測する。すなわち前半部では、もはや理解されなくなった古代のしるし用語 (*figura; imago et similitudo*) が削除され、*fac* で始められる素朴な祈願形式が *facere digneris (dignare)* と丁寧な表現に改められる。後半部では、聖変化後のパンとぶどう酒のうちにイエスの肉体的な現存を確保す

るため est を fiat に変更, 「quae nobis corpus et sanguis fiat」型を経て「ut nobis corpus et sanguis fiat」へと変えられていったという。文体上の変化は必然的に祈願文の機能をも変えてしまった。『デ・サクラメンティス』および古スペイン典礼の例は, Quam oblationem が本来ささげものの受納を願う祈りであったことを示している(上述の第1および第2段階を参照)。第3段階の諸写本も後半部「quae . . . fiat」はささげものの変化を先取りする内容でありながら, 前半部の受納の祈りに従属する構造をとっていた。しかしこれが「ut . . . fiat」となるに及んで, 前半部後半部の関係が逆転, 受納を願う前半部が変化を願う後半部に逆に目的づけられる結果となったのである<sup>42)</sup>。

その後 Quam oblationem は, 5回の十字架のしるしを伴いつつ, 文体上の変更を見ないまま, トリエント公会議後の『ローマ・ミサ典礼書』(1570)など重要なミサ典礼書諸版を経て第二ヴァティカン公会議後の典礼刷新を迎えることになる。次に引用する例は, トリエント公会議によるミサ典礼書の最終版, 1962年版の『ローマ・ミサ典礼書』に所収の Quam oblationem である(朱色で記された典礼注記は, 便宜上, 十字架のしるしを除き斜体に直した)。

[*Tenens manus expansas super oblata, dicit: Hanc igitur . . . Iungit manus. Per Christum Dóminum nostrum. Amen.*]

Quam oblati<sup>o</sup> nem tu, Deus, in ómnibus, quæsumus, *signat ter super oblata*, bene+dictam, ad+scríptam, ra+tam, rationábilem, acceptabilémque fácere dignéris: *signat semel super hostiam*, ut nobis Cor+pus, *et semel super calicem*, et San+guis fiat dilectíssimi Fílii tui *iungit manus*, Dómini nostri Iesu Christi.<sup>43)</sup>

### 1.3. 「ローマ・ミサ典礼書」(1970)

『典礼憲章』が第二ヴァティカン公会議により採択, 認可公布された(1963

年12月4日) ほぼ3ヶ月後の1964年2月29日、同憲章第25条が要請した諸典礼書の改訂作業を主任務とする「典礼憲章実施評議会 *Consilium ad exsequendam Constitutionem de sacra Liturgia*」が教皇パウロ6世により召集された<sup>44)</sup>。同評議会は39の分科会 (*Coetus*) を擁し、その第10分科会にミサ儀式 (*Ordo Missae*) の刷新が委ねられた<sup>45)</sup>。以下、第10分科会の多岐にわたる活動のなかからローマ奉献文の改訂に焦点を絞りその作業経過を記そう。

第10分科会の報告者 (*Relator*) J. Wager は任命後ただちに秘書の A. Hänggi とともにドイツのトリーア (*Trier*) で会合を開き、分科会に託された任務遂行のための作業案作成に入った。その際、標準型ミサ (*missa normativa*, 後に *forma typica* と改称) の導入、ミサの構造全体の再考、十字架のしるし、跪拜など典礼動作の簡略化の他、ローマ奉献文の改訂についても話し合われた。したがって第10分科会は、活動当初よりローマ奉献文自体の改訂をも念頭においていたことになる。この作業案は、1964年4月12日より17日まで開催された実施評議会総会に提出され、その場で了承された<sup>46)</sup>。その後、第10分科会は1965年10月までに計7回の作業部会を開き議論を重ねたうえで、同分科会委員 J. A. Jungmann の手になるABCの3つのローマ奉献文改訂案を盛り込んだ改訂ミサ式次第を作成、これを1965年10月18日より22日まで開催された実施評議会総会に提出する。このうちABの2案に基づくミサが総会会期中に試みられた。しかしながら、この試みは非公開であったため、一部報道機関による断片的な情報が反刷新派を刺激した面も手伝い、第10分科会のミサ刷新プログラム全体が評議会内の一部の他、評議会外の批判にまでさらされることになってしまう<sup>47)</sup>。これにより分科会の活動も一時滞る事態となった。硬直状態を乗り切るため、第10分科会は1966年5月24日一通の『覚え書き』を教皇パウロ6世に提出、それまでの作業を総括報告するとともに分科会のプログラムに関する教皇の見解を求めた<sup>48)</sup>。これに対し教皇は、同年6月20日の実施評議会議長 G. Lercaro への謁見の中で同『覚え書き』に対する返書を

手渡し、この中で「現行 [ローマ] 奉献文には改訂を加えないこと、ただし個々特定の機会に用いることのできるように、新しく奉献文を作成するかあるいは二三の [既存の] 奉献文を選ぶこと」との指示を下した<sup>50)</sup>。この教皇自らの指示がローマ奉献文の改訂作業に転機をもたらすことになる。以降、第10分科会はローマ奉献文の文言の改訂を断念、分科会内でもすでに早期より議論されていた新しい奉献文の作成へと作業の重点を移していったからである<sup>50)</sup>。ただし、新奉献文を作成する過程でこれらとローマ奉献文との調和を図る必要が生じ、最終的には一部教皇パウロ6世自身の提案をも含むいくつかの改訂がローマ奉献文に加えられることになる。制定報告への文言の付加および変更、「信仰の神秘 (Mysterium fidei)」の移動による応唱の導入、聖人表および祈願文の結句 (Per ipsum) への括弧の付加、後に述べる典礼動作の減少および移動、叙唱の増加、などである<sup>51)</sup>。刷新された『ミサ儀式書 (Ordo Missae)』は1969年4月3日付の使徒憲章により1969年4月6日に<sup>52)</sup>、「ローマ・ミサ典礼書 (Missale Romanum)」は1970年3月26日にそれぞれ公刊されている<sup>53)</sup>。

さて、以上に述べた理由によりローマ奉献文の改訂は最小限度におさえられ、Quam oblationem についても『ローマ・ミサ典礼書』(1970)では文言の変更は見られない<sup>54)</sup>。しかしながら、興味深いことに、この祈願文に伴う典礼動作が新たに付け加えられているのである。以下に『ローマ・ミサ典礼書』(1970)所収の Quam oblationem をその典礼注記(斜体で記す)とともに引用しよう。

[*Manibus extensis, prosequitur: Hanc igitur . . . Iugit manus.*  
(Per Christum Dóminum nostrum. Amen.)]

*Tenens manus expansas super oblata, dicit:*

Quam oblati6nem tu, Deus, in 6mnibus, quæsumus, benedictam, adscriptam, ratam, rationabilem, acceptabilemque facere digneris: ut nobis Corpus et Sanguis fiat dilectissimi Filii tui, D6mini nostri

Iesu Christi.

*Iungit manus.*<sup>55)</sup>

これを『ローマ・ミサ典礼書』(1962)と比較すると、1962年版にみられた5つの十字架の指示が削除され、また、それまで *Hanc igitur* の直前に置かれていた「ささげものの上に両手を延べて唱える (*Tenens manus. . .*)」の典礼注記が、祈願文後(結句 *Per Christum* の前)の「手を合わせる (*Iungit manus*)」の注記とともにそっくり *Quam oblationem* の前後に移されていることがわかる (*Hanc igitur* では司祭は両手を広げたままこれを唱え、*Quam oblationem* の前で手を合わせる注記となっている)。このうち十字架の指示の削除は、上述した1964年の作業案でも提案があり、1967年5月4日の『第二一般指針 (*Tres abhinc annos*)』(同年6月29日発効)によってすでに実施されていたものである<sup>56)</sup>。しかし両手を延べる動作は *Hanc igitur* に置かれたままであった。*Quam oblationem* は『第二一般指針』の時点では依然として両手を合わせたまま唱えられていたのである<sup>57)</sup>。この典礼動作の移動はしたがって、『ミサ儀式書 (*Ordo Missae*)』(1969年)および『ローマ・ミサ典礼書』(1970)の編纂作業もかなり進んだ段階で原稿に盛り込まれたものと推測される<sup>58)</sup>。いささか性急な印象さえ与える変更であるが、これが *Quam oblationem* の祈りの性格を決定的に方向づけることとなる。

#### 1.4. 聖別エピクレーシス?

*Quam oblationem* でささげものの上に両手を延べる典礼動作は、祈願文 *Quam oblationem* がローマ奉献文の聖別エピクレーシスに相当すると理解した当時の典礼神学と密接に関連している<sup>70)</sup>。R. Meßnerによると、第10分科会は、ローマ奉献文に内在するいわゆる「ローマの特質 (*genius Romanus*)」の抽出に力を入れていた。新奉献文を作成するにあたって、それら新奉献文においても「ローマの特質」が保持されることを目指したの

である。その結果、制定報告前の聖別エピクレーシスならびに制定報告後の  
 の交わりエピクレーシス、この2つのいわゆる「分割されたエピクレーシ  
 ス」こそが「ローマの特質」に相当すると考えられるに至った<sup>71)</sup>。その際、  
 アレクサンドリア典礼の（したがってローマ典礼とも近接する）『デル・バ  
 リゼー写本』（6/7世紀）所収の奉献文中に出る制定報告前の聖別エピク  
 レーシスが、ローマ奉献文の（制定報告前の）聖別エピクレーシスの傍証  
 として好んでとりあげられた。そして、この『デル・バリゼー写本』の聖  
 別エピクレーシスの例が「仮定上のローマ奉献文の分割エピクレーシスに  
 早々と調和させられた」のだという<sup>72)</sup>。しかしその後の研究は、アレクサン  
 ドリア典礼の特徴である制定報告前のエピクレーシスが「感謝の賛歌」中  
 の「天と地はあなたの栄光で満たされています」の句を引き継いで、ささ  
 げものの上に、ひいては教会の奉献行為自身の上に神のちからを呼び求め  
 るいわゆる「奉献エピクレーシス」とでも呼ぶべきものであることを明ら  
 かにしている（上に引用の『エウコロギオン』を参照）。アレクサンドリア  
 典礼のエピクレーシスは感謝の賛歌から派生、制定報告とをつなぐ橋渡し  
 の役を果たし、制定報告後のエピクレーシスと合わせ「二重のエピクレー  
 シス」となっているが、決して「分割された」エピクレーシスではない。  
 したがって『デル・バリゼー写本』ほど明確に（制定報告の前に）聖霊の  
 降下とささげものの変化を願う聖別エピクレーシスはアレクサンドリアの  
 典礼伝承ではむしろ例外である。また、『デル・バリゼー写本』は制定報告  
 の後かなり大きな欠落があり、制定報告後のエピクレーシスについても  
 不明確な部分がある。これらの見地から、新奉献文（「ローマ・ミサ典礼書」  
 （1970）の第2、3および第4奉献文）に採用された上記「（聖別と交わり  
 とに）分割されたエピクレーシス」はアレクサンドリア典礼の特徴ともい  
 えず、ましてや「ローマの特質」を示しているとはいえない、というのが  
 最近では通説となっている<sup>73)</sup>。

いずれにせよ、*Quam oblationem* がローマ奉献文の聖別エピクレーシス  
 に相当するとの認識が、それまで *Hanc oblationem* に置かれていた「両手

をささげものの上に延べる」典礼動作の移動を招いたことは疑う余地もない。例えば典礼憲章実施評議会の顧問をも務めた E. J. Lengeling は『ミサ典礼書の総則 (Institutio generalis Missalis Romani)』(1969) 第 55 項 c の解説の中で次のように述べている(「変化を願う祈り」との小見出しが付けられている)。

c) [55 項 c において] 聖霊に言及されていないことが目につく。その理由は明らかである。それは、新奉献文のように聖変化の前後にそれぞれ配置された、聖霊を呼び求める、あるいは聖霊に言及するエピクレシスばかりではなく、[ローマ奉献文のように] 聖霊の名を呼ばない *Quam oblationem* と *Supplices* をも包括的にエピクレシスと解釈するからである<sup>74)</sup>。

標準型ミサにおける奉献文の唱え方について定めた同総則の第 109 項の解説でも E. J. Lengeling は、「ささげものの上に手を延べる動作は *Hanc igitur* から *Quam oblationem* へと移され、本来の位置を取り戻した」と述べ、さらに後年にもこの見解を繰り返し表明している。

聖別エピクレシスの際の司式司祭の動作については、4つの奉献文すべてに従来の [ローマ] 奉献文と同様のことが記されている。司式司祭は両手をささげものの上に延べる (*manus extensas super oblata tenens*)。ただし 1969 年の『ミサ儀式書 (Ordo Missae)』では、従来の [ローマ] 奉献文の両手を延べる動作が(歴史的には二次的な)一節 *Hanc igitur*(エピクレシスの意味はなく、交換可能な受納を願う祈りの 1 つである) から再び、これに続くエピクレシスの、すなわち [ささげもの] 変化を願う一節 *Quam oblationem* に移された。[……] 司式司祭の手を延べる動作をエピクレシスと解釈すべきであることは(後代時折その意味が理解されなくなったにせよ) これを



疑いえない。昔から——すでに旧約聖書においても——手を延べる動作 [= 按手] は人の (司教, 司祭, 助祭の叙階, 堅信, 洗礼, ゆるしの秘跡, 病者の塗油) あるいは物の聖化, 祝福を意味し, 人の場合には職権の委譲をも意味した。この動作に伴って唱えられる言葉 (聖別の祈り) は, その核心において通常明確に聖霊, 「聖化するお方 (1ペト 1, 2 参照)」[の降下]を願う祈りを含んでいる。そのようなわけで, 3つの新奉献文, 東方教会のエピクレシス, また特に刷新前後のローマ典礼の叙階の祈りおよび堅信の際の按手の祈りの中で [聖霊が呼び求められるのである]<sup>75)</sup>。

両手を延べる典礼動作により聖別エピクレシスの性格を帯びるにいたった *Quam oblationem* は, その後の各国語訳にも影響を及ぼしている。仏伊西英独の5つの国語版を検証した R. Meßner によると, ラテン語原版の「*quam oblationem [...] benedictam [...] facere digneris...*」の訳にあたり仏伊西の各国語版は「聖[なるもの]としてください(仏 *sanctifie*, 伊 *santifica*, 西 *santifica*)」と「聖別用語」を補い, 聖別エピクレシスの性格を前面に出している。R. Meßner の批判は特に独語版に向けられるが, それによると, 独語版では, *oblatio rationabilis* と *corpus et sanguis Chtisti* とをコロネーション(:)を挟んで同格に置き, ささげものが「霊的ささげもの *oblatio rationabilis* すなわちキリストのからだと血となるように」願う訳になっている他, 他の多くの国語版同様, 続く *Qui pridie* は関係代名詞で始まるにもかかわらずこれを独立文として扱っているという<sup>77)</sup>。

日本語版はどうであろうか。まず聖別用語は避けられ, *Quam oblationem* の前半部後半部もそれぞれ独立文となっている<sup>78)</sup>。聖別エピクレシスの性格は, 両手を延べる動作以外は, (ラテン語原文の伝承過程で挿入された)「*benedictam [facere digneris]*: 祝福 [してください]」にしろうじて見いだされるのみである。*Qui pridie* は独立文であるが, これは日本語の文法構造からしても賢明な処置であったといえる。ラテン語原版

Quam oblationem にある 5 つの形容詞は、benedictam [facere digneris] を除き「受け入れ、まことのささげものにしてください」と簡潔に 2 つの表現にまとめられている。ささげものの祝福、受納、変化を願う祈りを漸層法的につなぎ（神よ、これを祝福し、受け入れ、まことのささげものにしてください。[……] 主イエス・キリストの御からだと御血になりますように）、制定報告への橋渡しの役を果たしている。全体として、ラテン語原版の「法的性格」（上述）を弱めた、また機能的にも制定報告に方向づけられている点を評価できよう。

さて R. Meßner は、Quam oblationem のいくつかの現代語訳において聖別用語が補われたことを批判する文脈で次のように述べている。

[仏語版（本稿注 77 参照）引用の後] この翻訳の決め手となる語は、奉献文中に出る [この祈願文の基調となるべく意味を] 含意する *rationabilis* ではなく——翻訳が困難なためにこれを避けたのであろうが——、(『デ・サクラメンティス』の奉献文引用にはない) *benedictus* である。この語によって [祈願文は] 受納の祈りから祝福を願う祈りとなっているが、これがさらに、奉献文に全く登場しない、典礼伝承においてはしばしば聖別用語として使用される「聖化する」という語によって補強されているのである<sup>80)</sup>。

確かに *benedictus* という語には神のはたらきかけを願う意味が込められており、その意味ではこの祈願文を広くエピクレーシスと解釈することもできる<sup>81)</sup>。しかもこの語はすでに伝承の比較的早い段階に登場するため、この祈願文のむしろ形成期における挿入と理解することも可能だろう。にもかかわらず、R. Meßner はこの語に比重をかけた翻訳に異を唱える。この祈願文の基調となるべきは、J. A. Jungmann 同様、やはり *rationabilis* なのである。それでは「*rationabilis* なささげもの」とは何か。なぜこの語が *Quam oblationem* の基調とならねばならないのだろうか。

## 2. Oblatio rationabilis —— λογική θυσία

### 2.1. 古代ギリシア哲学

古来ギリシア哲学の概念であった *λογική θυσία* がキリスト教東方典礼に受容され、これがさらに西方典礼に *oblatio rationabilis* として受容されたことは、O. Casel の研究以来よく知られているところである<sup>82)</sup>。ギリシア神秘哲学には、ピタゴラス以来、犠牲獣の屠りなどの宗教儀式の外面よりも奉献者の内面の純粹さを重視する流れがあった。彼らは血の滴る獣、蜜、ぶどう酒、香といった物としての犠牲にではなく、むしろ人の内から出る賛美、徳、祈りなどに、神によみされる真のささげものとしての価値を見出した。分けても人の心から出て発語される「賛美 (*εὐλογία*)」「感謝 (*εὐχαριστία*)」が能う限り最も尊いささげものであった<sup>83)</sup>。一方、人はそれによって賛美が可能になるところの言語能力を、神の領域にある永遠の *λόγος* に負っている、とも考えられた。*Λόγος* は古来、ギリシア哲学の基礎用語であり、例えばストア哲学では存在と世界の根源であった。ロゴスは創造者として世界の原因となり (*λόγος σπερματικός*)、永遠不変の普遍ロゴスとしてこれを治める (*κοινὸς λόγος*)。同時にこのロゴスは人間にも分与されており、これにより神々と人間とのコイノニアが可能となる。したがって真の神礼拝も、人間に与えられた内なるロゴスに基づいてこそ正しくなされ得ると考えられたのである<sup>84)</sup>。このような内在的なロゴス観の中で、精神化された「ささげもの *θυσία*」が *λογικός* と形容されるようになる。O. Casel によると、*λόγος* は宗教用語 *πνεῦμα* の哲学的な言い回しであり、その意味では *πνεῦμα* の類義語でもあった。ギリシア神秘哲学が *λογική θυσία* というとき、そこで意味されているものは *πνευματική θυσία* (霊におけるささげもの、霊的ささげもの) に他ならない<sup>85)</sup>。例えば『ヘルメス文書』のポイマンドレスの結びの賛美 (*εὐλογία*) は、口から発語される賛美によっては到底到達しがたい神の崇高さを次のようにたたえる。沈黙と発語とを組み合わせた撞着語法により、ささげも

のの精神性が極度に高められている。

靈的な清いささげものを受け入れてください (*δέξαι λογικὰς  
θυσίας ἀγνάς*)。あなたに向かう魂からの [ささげものを]。口に言い  
表し難く、言葉に尽くし難いお方、ただ沈黙によってのみ呼び求めら  
れるお方よ<sup>86)</sup>。

これによると、人間の言語領域をも越えた、その意味で「沈黙」のみが  
ささげることのできる清い心 (靈)こそが神に対する最も尊いささげもの  
であるという。ささげものとしての精神を強調する姿勢は、キリスト教グ  
ノーシス文書『ソロモンの頌歌』の次の一節にも見いだされる。

私は主の司祭であり、司祭として彼に仕えている。私は彼に彼の思  
いのささげものをささげる。それはこの世の [ささげる] ようなもの  
ではなく、彼の思いも肉のものではない。また肉のように彼に仕える  
かの者たちのようでもない。主へのささげものとは正義と心の唇の清  
らかさである<sup>87)</sup>。

ユダヤ教にも旧約聖書以来「主の御声に聞き従うこと (サム上 15, 22)」  
「告白 (詩 50, 23)」 「打ち砕かれた靈, 打ち砕かれ悔いる心 (詩 51, 19)」  
こそが神に求められるいけにえであるとする伝統がある<sup>88)</sup>。アレクサンド  
リアのフィロン († 45/50 年) は奉献者の内面の清らかさを次のように強調  
している。

このこと (早朝の神殿内での香の聖化以前に神殿外に犠牲を持ち込  
んではならないという規定)は、神のみ前では、犠牲の数量ではなく、  
ささげる者の全き清く靈的な魂 (*τὸ καθαρῶτατον τοῦ θιουτος  
πνεῦμα λογικόν*)こそ尊いのだということを、象徴的に表しているに

他ならない<sup>89)</sup>。

## 2.2. 新約聖書

このような思潮の影響は、ロマ12, 1と1ペト2, 2の2箇所に出る新約聖書の *λογικός* にも見られる。まずパウロはロマ12, 1で、ローマのキリスト者に彼らの「体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとしてささげ」、そのようにして彼らが「ロゴスによる礼拝 (*λογική λατρεία*)」を遂行すべきことを勧告する。U. Willkensによると、パウロは、キリスト者の礼拝を異教の礼拝から区別する目的のためここで意図的にストア用語の *λογικός* を使っている<sup>90)</sup>。*Λογικός* はしたがって解釈学的に用いられており、「真の、本来の [礼拝]」ほどの意味合いを持つ。ただし内容的には、パウロはこの語にストアと真っ向から対峙する意味を込める。キリスト者にとっての「真の礼拝」とは、ストアのように、自己の内面に沈潜しそこに人が神と共有する普遍ロゴスを見出すいわば自己充足、自己礼拝ではなく、救済された恩恵にふさわしく、体をも含めた自身の全て、いわば「人生」を「生けるいけにえ」として神にささげることにある。したがって、礼拝の「精神性」もキリスト者の「体 (からだ)」を通してこそ実現される。「ストアの教えならびに精神 [を重視する他の] 宗教の神秘教義にとっては侮辱」ともいえる逆説的な礼拝理解がここで提示されているという<sup>91)</sup>。一方、1ペト2, 2は、救いに達する食物として「混じりけのないロゴスの乳を (*τὸ λογικὸν ἄδολον γάλα*)」求めるよう新受洗者に勧めている。乳は古代の秘儀宗教において神性を仲介するシンボルとしてよく知られていた (例えばエジプト神話のイシス神の不死の乳、イタリア南部のディオニュソス秘儀の乳の浸礼による聖別など)<sup>92)</sup>。N. Broxによると、ここでいわれる「ロゴスの乳」とは同書1, 23の「神の変わることのない生きた言葉 (*διὰ λόγου ζῶντος θεοῦ καὶ μένοντος*)」に養われることに他ならず、その意味で *λογικός* と神の「ことば (*λόγος*)」との間に意義ある関連が生じている<sup>93)</sup>。これと呼応するかのように続く1ペト2, 5では、神の言

葉の乳(λογικὸν γάλα)に養われたキリスト者が、受けた恵みにふさわしく霊的ないけにえを(πνευματικὰς θυσίας)ささげるべきことが勧められる。

### 2.3. 東方典礼伝承

新約聖書の2箇所の λογικός は、いずれも聖餐の文脈では用いられておらず、したがって「ロゴスによる礼拝(ロマ12, 1)」「霊的ないけにえ(1ペト2, 5)」も聖餐(のささげもの)というよりはむしろキリスト者の生き方の指針を示すものであった。しかしこの生活指針は当然のことながら典礼においても意味を持つようになる。教父ならびに典礼伝承の λογική θυσία は、特に彼らが聖餐を語る文脈では、自己の内に住む神のことば(Λόγος)あるいは聖霊にはたらきかけられたキリスト者が聖餐式において自己奉献をなすこと、と見なされた<sup>94)</sup>。この自己奉献は、ことばと行いというからだの全体を通して、すなわち具体的には「賛美(ことば)とパンとぶどう酒の奉納(行い)」によって遂行されると考えられた。こうして λογική θυσία は、「祈りの音響体(Klang-Leib)と、日用のものから切り離され[特に神のみ前に置かれ]たパンとぶどう酒の奉納という聖餐行為のうち、キリスト者[独自]の存在のあり方を[目に見えるかたちで]からだあるものとして(leiblich)表現する」<sup>95)</sup>ものとなった。例えばユスティノス(†165頃)は、このことばと行いによる奉献の両面性を消極的な表現ながら次のように言い表す。

ふさわしい者によりささげられる祈りと感謝のみが唯一完全で神にのみされるささげものであることをわたしも主張いたします。キリスト者もこれのみを行うよう伝え受けているからです。食べ物と飲み物(パンとぶどう酒)にあずかるときにも同様です。その際彼らは神の御子が彼らのために耐えられた受難を記念するのです<sup>96)</sup>。

さらにユスティノスは、イエスの受肉とキリスト者の聖餐との連続性を強調して次のように述べる。「ロゴス [の降下を求める] 祈りを通して (*δι' εὐχῆς λόγου*)」という表現が、キリスト者の聖餐式における奉獻と交わりがロゴス自身によってはたらきかけられ実現するものであることを浮き彫りにしている。

というのも、わたしたちはこれら (エウカリスティアと呼ばれる食物) を普通のパン、普通の飲み物として受けるのではないからです。むしろ次のように教えられています。すなわち、神のロゴスによって肉となられたわたしたちの救い主イエス・キリストがわたしたちの救いのために肉と血とを [受けられた] ように、彼 (神) からのロゴス [の降下を求める] 祈りを通して感謝が唱えられた食物もまた、受肉された方イエスの肉と血であり、この食物によってわたしたちの肉と血も [キリストのからだの] 聖成へと養われるのである、と<sup>97)</sup>。

典礼伝承においては、*λογικὴ θυσία* はしばしば「無血の (*ἀναίμακτος*)」という形容詞とともに用いられている。これは異教の「血による犠牲」との区別を強調する他、*λογικός* の概念を明確化、具象化するのにも役立った<sup>98)</sup>。例えば380年頃シリアで成立した『使徒憲章』は次のように述べる。

血による犠牲のかわりに (*ἀντὶ θυσίας τῆς δι' αἱμάτων*)、神は霊的、無血かつ神秘的な [ささげものを] (*τὴν λογικὴν καὶ ἀναίμακτον καὶ τὴν μυστικὴν*) 制定された<sup>99)</sup>。

信徒の奉獻の共同体的性格を強調するため *θυσία* の同義語として「礼拝 (*λατρεία*)」の語を用いることもできた。この表現は古く、アレクサンドリア典礼のマルコ奉獻文の一部を取めた2世紀から3世紀にかけてのパピルス断片 (Pap. Strasb. gr. 254) にすでに見ることができる。キリスト者

の奉獻は「キリストによってキリストとともにまた聖霊とともに」遂行されると述べ、聖餐の奉獻の眞の主体が（一度限りの十字架上の奉獻により全人類の救済を果たした）キリストにあることを表明している点が注目される。

[……] イエス・キリストによって彼とともにまた聖霊とともに、わたしたちはあなたに感謝をささげつつこの靈的なささげもの（[τ] ἡν θυ [σί] αν τὴν λογικὴν）と無血の礼拝を（τὴν ἀναί [μακτ] ον λατρε [ίαν] ταύτην）ささげます。[……]<sup>100)</sup>

ビザンツ典礼のバシレイオス奉獻文（核となる部分は4～5世紀にかけて成立）では次のような表現となっている。

（奉納の祈りにおいて）[……] あなたの聖なる祭壇に近づくわたしたちをあなたの豊かなあわれみのうちに受け入れてください。わたしたちが、わたしたちの罪と民の過ちのために、この靈的な無血のささげものを（τὴν λογικὴν ταύτην καὶ ἀνάιμακτον θυσίαν）あなたにささげるにふさわしい者となるために<sup>101)</sup>。

（奉獻文において）在る方、支配される方、主、神、全能の父、拝まれるべき御方よ。あなたをほめ、あなたを賛美し、あなたをたたえ、あなたを拝み、あなたに感謝をささげ、まことに唯一であるあなたを崇め、打ちひしがれたところ、謙遜のころをもってわたしたちのこの靈的な礼拝を（τὴν λογικὴν ταύτην λατρείαν ἡμῶν）ささげることとは、まことにふさわしく、あなたの聖性の偉大さに適うことです。[……]<sup>102)</sup>

エルサレムの主教キュロス（† 386/7）あるいは彼の後継者ヨハネス（† 417）の手になるともいわれる『秘義教話』の第5教話は、おそらくアンティ



オキア（シリア）典礼のヤコブ奉献文（の初期形態）をもとに行われたものと思われるが、ここでは *ἀναίμακτος* との組み合わせは保持しつつも *λογικός* が *πνευματικός* にとってかわられているのを見ることができ

それから霊的なささげもの、無血の礼拝を (*τὴν πνευματικὴν θυσίαν, τὴν ἀναίμακτον λατρείαν*) 遂行したあと、わたしたちはか  
のあがないのささげものの上に、教会の共通の平和のため、世の平  
穩のため、王のため、[……] 神に祈ります<sup>103)</sup>。

#### 2.4. 西方典礼伝承（ローマ典礼）

東方の典礼伝承が *λογικός* を *πνευματικός* の同義語として用いることができたのに対し、西方では、すでに古ラテン語訳聖書において *λογικός*（ロマ12, 1, 1ペト2, 2）の訳として「*rationabilis*」が定着していたものの、これを *πνευματικός* の訳語「*spiritalis*」と同じ意味で使うことは困難であった。いわゆる直訳借用（敷き写し）の手法によって原語 *λογικός* に訳語 *rationabilis* が充てられたものの、*rationabilis* はラテン語圏ではもともと「分別のある」「理性に適った」あるいは「本質に適った」という意味に理解されていたからである。その意味では *spiritalis* の対義語となる場合さえあった。したがって、新たに *rationabilis* に課せられた聖書のかつ東方神学的な「神のことば (*Λόγος*) あるいは聖霊にはたらきかけられた、その意味で霊的な」という含意は、時とともに次第に剝落してゆき、「理性に適った」「本質に適った」という本来の意味のみが残ることとなった<sup>104)</sup>。アンブロシウス (†397), 教皇レオ1世 (†461), 教皇グレゴリウス1世 (†604) の3者における *rationabilis* の用語法を比較した O. Casel によると、アンブロシウスはこの語を「理性的な」という通常の意味の他「霊的な」「神的な」という意味でも使い、東方神学の名残がまだ残っている。これに対し、後代のレオとグレゴリウスの両者では *rationabilis* はもっぱら「理

性に適った」「本質に適った」「根拠のある」という意味で使われ、東方的な語義はすでに消失してしまっているという<sup>105)</sup>。

こうした傾向は典礼文自体にもあらわれる。例えば上述のアンブロシウスの『デ・サクラメンティス』では、Hanc oblationem (ローマ奉献文の Quam oblationem に相当) と続く Qui pridie の後、ローマ奉献文ならば Unde et memores に相当する Ergo memores の祈願文が引用されるが、ここには *rationabilis* を含め東方典礼の影響を示す 3 つの形容詞が聖餐のささげものを修飾する語として出る。

それゆえわたしたちは、彼の栄光ある受難、黄泉からの復活、昇天を記念して、あなたにこの汚れなきささげもの (*inmaculatam* [*<ἀμιάντος* あるいは *ἄμωμος*] *hostiam*)、霊的なささげもの (*rationabilem* [*<λογικόος*] *hostiam*)、無血のささげもの (*incruentam* [*<ἀναίμακτος*] *hostiam*)、この聖なるパン (*hunc panem sanctum*) と永遠のいのちの杯をささげます<sup>106)</sup>。

しかし伝承の過程で、「霊的な」という意味を失った *rationabilis* が *incruentus* とともに削除され、かわりに新たに *purus* と *sanctus* とが補充されることとなる。このうち *purus* は *inmaculatus* の類義語であり、ささげものの「汚れのなさ」を肯定的に「清らかさ」と形容しこれを補ったもの、また *sanctus* も、ささげものを続く「聖なるパン (*panis sanctus*)」と関連づけるために採用されたものとみられる。さらに、*hostia* が *purus*, *sanctus*, *inmaculatus* の各形容詞の前に置き換えられており、そのため意味上のアクセントも各形容詞から *hostia* へと移っている<sup>107)</sup>。『古ゲラジウス秘跡書』(前出) の Unde et memores の例を次に示そう。

ですから主よ、わたしたち、あなたの奉仕者と聖なる民は、あなたの御子キリスト、わたしたちの神なる主の、かくもとうとい受難、黄

泉からの復活、栄光ある昇天を記念して、あなたの与えられたたまものうちから、清いいけにえ (*hostiam puram*)、聖なるいけにえ (*hostiam sanctam*)、汚れなきいけにえ (*hostiam immaculatam*)、永遠のいのちの聖なるパン (*panem sanctum uitae aeternae*) と永遠の救いの杯を、栄光ある権威に満ちたあなたにささげます<sup>108)</sup>。

*Rationabilis* の語を含むローマ奉献文中の祈願文のうち、制定報告直後の *Unde et memores* はその伝承過程において *rationabilis* が消失していった例であるが、一方、伝統的な祈りの一文言として削除を免れた例もあった。これが、制定報告直前に置かれた祈願文 *Quam oblationem* である<sup>109)</sup>。ただし、すでに述べたように、*rationabilis* に託されていた *λογικός* の聖書の東方神学的意味は比較的早い時期に失なわれていた。例えば初期カロリング期のあるミサ解説書は *Quam oblationem* の祈願文を解説する項で次のように述べている。

ここまでは嘆願の祈りであった。これから引き続き聖別である。これは *Quam oblationem* で始まり、*nobis quoque peccatoribus* にまで及んでいる。 *Benedictam facere digneris*, [すなわち] この [ささげものを] 祝福して下さいますように [と祈るのである]。[……] *rationabilem*, [すなわち] このパンとぶどう酒はそれ自体としてはふさわしからざるもの (意味なきもの、理性なきもの *irrationabile*) であるが、しかし司祭は、[これが] 司祭によりふさわしく正しく執り行われ (*rationabiliter tractatus*)、全能の神によって聖別され、彼の御子のからだに変わることによって意義深いものとなるよう [祈り] (*rationabilis fiat*)、 「わたしたちのために (*ut nobis*)」、すなわちわたしたちの救いのために 「あなたの最愛の御子の御からだと御血になりますように」と祈るのである。なぜなら [パンとぶどう酒は] 聖別の後では実に真のキリストの御からだ、真のキリストの御血であるか

ら<sup>110)</sup>。

Rationabilis が irrationabilis との対比によって説明されている点がまず目を引く。両者を分かつものは聖別である。つまりささげもの自体は irrationabilis であるが、司祭がこれを注意深くふさわしく正しく (rationabiliter) 扱うことにより (典礼を執り行うことにより)、また同時に、神がささげものを聖別することにより、意義深いささげもの (rationabilis [oblatio])、かのキリストの奉獻、すなわちキリストのからだと血に変化するという。Oblatio rationabilis はもはや、ささげものを通して遂行される教会の自己奉獻という意味では理解されていない。むしろ聖変化後のささげもの「あなたの最愛の御子の御からだと御血」を指している。解釈原理は「聖別 (聖変化)」の側にあり、ここから oblatio rationabilis が説明されているのである。Rationabiliter も、聖別のために果たすべき司祭の態度を表現する語として用いられている。これには「聖変化という秘義にふさわしく儀式を執り行う」という典礼の外的要素をも視野に入れた意味が込められている<sup>111)</sup>。

ただし、「靈のないけにえ (1 ペト 2, 5)」という理念そのものが典礼 (神学) から姿を消したわけでは決してない。O. Casel によれば、この理念自体は比較的早い時期に「spiritalis hostia」の表現をとりローマ典礼に受け継がれていったのである<sup>112)</sup>。次に挙げる 3 例は『ヴェローナ秘跡書』(Verona, Bibl. capitolare Cod. 85, 7 世紀初頭) 所収の奉納祈願 (Oratio secreta) である。このうち第 1 と第 2 の例では、パンとぶどう酒の奉納を通して、靈にうながされたキリスト者共同体のことばと行いによる自己奉獻が遂行されることが表現されている。後 2 者、第 2 と第 3 の例ではキリスト者のささげものが異教の「流血の」犠牲 (獣) と対比される。特に第 3 例は、キリスト者の自己奉獻を通して、「1 度きり流血した」キリストの十字架上の奉獻、その意味で再び繰り返される必要のないけにえが、「聖靈の御はたらきの力によって」いわば「聖靈の火」によって現在化するこ

とを表明している点で非常に興味深い。成立年代はいずれも5世紀あるいは6世紀頃と推測されている。

主よ、いつくしみによってこのたまものを聖なるものとし、霊的なささげものの奉獻を受け入れ (*hostiae spiritalis oblatione suscepta*) わたしたち自身をもあなたのための永遠のささげもの (*munus*) としてください<sup>113)</sup>。

いと高き父よ、わたしたちは犠牲 [獣] の肉の陰りを遠ざけ、へりくだった奉仕の心で (*supplici seruitate*) あなたに霊的なささげものを (*spiritaalem hostiam*) 奉納いたします。[……]<sup>114)</sup>

主よ、あなたの民のささげもの (*munus*) をこころよくみそなわしてください。あなたの祭壇の上には [このささげもののために] ふさわしくない火 [が降ったり] 分別のない生き物の血 (*inrationabilium cruor animantum*) が流されることはありません。否むしろ聖霊の御はたらきの力により (*sancti spiritus operante uirtute*), [この] ささげもの (*sacrificium*) はもはやわたしたちの祭司 [キリスト] 自身の御からだと御血なのです [から] (へブ9, 11-14 参照)<sup>115)</sup>。

### 3. 結 び

ローマ奉獻文の一節 *Quam oblationem* の形態史は、典礼文の伝承がいかに時代の思潮に左右されるかということを如実に示している。この祈願文はもともと *λογικὴ θυσία* の概念から着想を得た。古代ギリシア神秘哲学においてこれは、人間に分け与えられた存在と世界の根拠 *λόγος* による神礼拝、心の内から湧出する賛美 (*εὐλογία*) と感謝 (*εὐχαριστία*) による霊のささげものであった。その際、犠牲獣の肉との対比によって奉獻者の心の清らかさが強調された。同様の思想は旧約以来ユダヤ教にも息づい

ている(ただし70人訳には *λογικός* の語は見あたらない)。一方、新約聖書に2回出る *λογικός* は、いずれもキリスト者の生活指針を示す文脈で使われる。ロマ12, 1は「死者の中から生き返った者として五体を神の義の道具としてささげる」(ロマ6, 13参照)ことこそが、キリスト者の存在の本質に適った礼拝(*λογική λατρεία*)であると勧告する。同様に1ペト2, 2も、救いの恵みを受けたキリスト者が、絶えず神の言葉の乳(*λογικὸν γάλα*)に養われ、自身を神によみされる霊的なささげもの(*πνευματικαὶ θυσίαι*: 1ペト2, 5)としてささげるように勧める。これが典礼伝承において、神のロゴス、イエス・キリスト、霊である主(2コリ3, 17)に、あるいは聖霊にうながされたキリスト者が聖餐式において「まことのささげもの」をささげること、すなわち「賛美(*εὐλογία*)」と「ささげもの(キリストの奉獻の *ὁμοίωμα/ἀντίτυπος/εἰκῶν* としてのパンとぶどう酒)の奉納」を通して自己奉獻を表現すること、そのようにして「キリストの一度限りの十字架上の奉獻に巻きこまれてゆくこと」と理解されるようになった<sup>116)</sup>。

本稿でとりあげたローマ奉獻文の一節 *Quam oblationem* は以上のようなキリスト教奉獻観を背景としている。この祈願の主眼は、『デ・サクラメンティス』に引用されたその初期形態が示すように、元来ささげものの受納を神に願うことにあった。しかしこの祈願文の基調となる *oblatio rationabilis* に込められた東方的な含意、すなわち「神のロゴス、キリスト、あるいは聖霊にうながされたキリスト者の霊的なささげもの」という意味は、*rationabilis* が直訳借用(敷き写し)による訳語であったためラテン語本来の語感にそぐわず、比較的早い時期に失われていった。カロリング期以降 *oblatio rationabilis* は、キリスト者の自己奉獻というよりはむしろ「祝われる秘義にふさわしく (*rationabiliter*) 執り行われ、神によって聖別された、理性ある (*rationabilis*) キリストのからだと血(そのもの)」という意味に解釈されるようになる。一方、キリスト者のことばとささげものによる奉獻行為という「霊的なささげもの」の理念それ自体は、「*oblatio*

spiritalis」の表現を介して受け継がれてゆく。

同様の意味喪失は Quam oblationem の初期形態に保持されていたしるし用語 (similitudo/figura/imago) にも見ることができる。カロリング期以降のゲルマン・フランク的な肉体、物質重視の思考構造が、祝われる現実がしるしにおいて現在するという、古代の象徴論に基づく聖餐観を理解し難いものとしていたからである。これらしるし用語は、伝承過程で Quam oblationem から姿を消してゆくことになる。しるし用語の消失とほぼ並行して、Quam oblationem はパンとぶどう酒が主のからだに血に変化することを願う祈りへと変貌する。そしてこの変化のはたらきのために特に、この祈りの際に聖霊が呼び求められると解釈されるようになるのである<sup>117)</sup>。

第二ヴァティカン公会議を受けて刷新された『ミサ典礼書』(1970)の各国語版は、この祈願文の「ささげものの受納を願う祈り」としての性格を再獲得したといえる。これは例えば日本語版では「(これを祝福し)受け入れ」という表現にみられる。しかし同時に「ささげものの変化を願う祈り」としての性格をも保持している。これは第1に、各国語版が、この祈願文の形態史の最終段階を示すラテン語規範版に依っているためであり、また第2に、(Hanc igitur から移動された)両手をささげものに延ばす司祭の典礼動作によって、この祈りの聖別エピクレシスとしての性格がさらに強められているからである。

## 注

- 1) *Missale Romanum. Ex decreto Ss. Oecumenici Concilii Vaticani II instauratum auctoritate Pauli pp. VI promulgatum. Editio typica*, Vaticano 1970, 451. 引用した日本語版は典礼司教委員会編『ミサ典礼書』(カトリック中央協議会, 1978年)639頁による。ただし日本カトリック典礼委員会編『ミサ典礼書の総則と典礼暦年の一般原則』(カトリック中央協議会, 1994年, 第2版)182頁の表記にならい「イ

- エズス」を「イエス」とした。
- 2) Cf. R. Meßner, *Die Meßreform Martin Luthers und die Eucharistie der Alten Kirche. Ein Beitrag zu einer systematischen Liturgiewissenschaft* [IThS 25], Innsbruck-Wien 1989; *Ibid.*, “Einige Probleme des eucharistischen Hochgebetes, in: Bewahren und Erneuern. Studien zur Meßliturgie” (*IThS 42 = FS H. B. Meyer. Hrsg. v. R. Meßner, E. Nagel und R. Pacik*), Innsbruck 1995, 174-201.他にこの祈願文の個別研究としては W. J. Lallou, *The “Quam oblationem” of the Roman Canon. A Study of a Significant Prayer of the Mass*, Washington, D. C. 1943 がある。
  - 3) Cf. J. A. Jungmann, *Missarum Sollemnia. Eine genetische Erklärung der römischen Messe. 2Bde.*, Wien<sup>9</sup>1962, II 237.
  - 4) Cf. R. Meßner, *Probleme*, *op. cit.*, 177-180. 彼はこの4段階を図表で示すが (*ibid.* 178), その際ボットのローマ奉獻文の批判版 *Le canon de la messe romaine. Ed. critique, introduction et notes par B. Botte (TEL 2)*, Louvain 1935 (Reimpression 1962), 36-39 を参考にする。
  - 5) この奉獻文の研究史は J. Schmitz, *Gottesdienst im altchristlichen Mailand. Eine liturgiewissenschaftliche Untersuchung über Initiation und Meßfeier während des Jahres zur Zeit des Bischofs Ambrosius († 397) (Theoph. 25)*, Köln-Bonn 1975, 384-412 に簡潔にまとめられている。これによると『デ・サクラメンティス』の奉獻文の作者は特定できないが、ローマで教育を受けた者らしい。そのためアンブロシウスの自作である可能性も残るといふ (*ibid.* 398)。
  - 6) *Sacr.* 4, 5, 21 (CSEL 73, 55, 2-5): 「わたしたちの主イエス・キリストの御からだと御血のかたどり (figura) であるこのささげものを、わたしたちのために、承認を受けたもの (scriptam), 霊的なもの (rationabilem), みこころに適ったもの (acceptabilem) としてください。[このお方キリストは] 受難の前日 (Qui pridie) ……」なお試訳のために、アンブロジウス『秘跡』(熊谷賢二訳, キリスト教古典叢書 3, 創文社, 1993 年) 114-115 頁の他 *Ambrosius. De sacramentis. De mysteriis. Über die Sakramente. Über die Mysterien. Übers. u. eingel. v. J. Schmitz (FC 3)*, Freiburg-Basel-Wien u. a. 1990, 149; B. Botte (ed.), *Ambroise de Milan. Des sacraments. Des mysteres. Explication du symbole (SChr 25bis)*, Paris 1980, 115 をも参考にした。
  - 7) Cf. R. Meßner, *Probleme*, *op. cit.*, 176-177. 関係詞 quod には 2 通りの訳の可能性がある。第 1 は quod を haec oblatio にかかる関係代名詞ととる方法, 第 2 は quod を因由の関係詞として解釈する方法である。Cf. O. Casel, “Quam oblationem”, *JLw* 2 (1922) 98-101. 100; *Ibid.*, “Ein orientalisches Kultwort in abendlandischer Umschmerzung,” *JLw* 11 (1931) 1-19. 10; B. Botte, *Ambroise de Milan (SChr 25bis)*, *op. cit.*, 115; J. Schmitz, *Ambrosius (FC 3)*, *op. cit.*, 149;



- R. Meßner, *Meßreform*, *op. cit.*, 88. いずれにせよ, quod 以下が先行する「そなえものの受納の祈願」に従属する点では一致する。なお *figura* については後出の *imago et similitudo* の語とも併せて後述する (1.2.)。
- 8) Cf. J. Schmitz, *Gottesdienst*, *op. cit.*, 388-389.
- 9) Cf. Meßner, *Probleme*, *op. cit.*, 178-179.
- 10) Cf. H. B. Meyer, *Eucharistie. Geschichte, Theologie, Pastoral* (GDK 4), Regensburg 1989, 159. このタイプの典礼書としては7世紀前半頃編集された叙唱, 公式祈願などを収めるいわゆる『ヴェローナ秘跡書』がある。
- 11) Cf. K. Gamber, *Codices liturgici latini antiquiores. Secunda editio aucta*. Pars I (SFS 1/1), Fribourg/Schweiz 1968, 196-197. なお, 以下に引用する個々の典礼書写本について C. Vogel, *Medieval Liturgy: An Introduction to the Sources. Revised and Translated by W. G. Storey and N. K. Rasmussen with the assistance of J. K. Brooks-Leonard*, Washington, D. C. 1986 の該当頁をも参照。
- 12) *Liber Missarum de Toledo y libros místicos. Ed. J. Janini. Tomo I.*, Toledo 1982, 526 (Nr. 1440): 「(主よ, あなたのしもべたちをここにかけ), あなたの御子わたしたちの主あがない主イエス・キリストの御からだと御血のすがた (*imago et similitudo*) であるこの彼らのささげものを, 祝福された (*benedictam*), 有効な (*ratam*), 霊的なもの (*rationabilem*) としてください。」同様の祈願文はシロスの司教儀式書 (Silos, Biblioteca del Monastero, Cod. 4, 11世紀シロス修道院にて筆写) にも見られる。Cf. *Liber ordinum Episcopalis (StSil 15)*, Silos 1991, 256 (Nr. 758): 》[. . .] *Quorum oblationem benedictam, ratam, rationabilemque facere digneris; que est ymago et similitudo corporis et sanguinis iesu christi filii tui ac redemptoris nostri.* 《
- 13) Cf. R. Meßner, *Probleme*, *op. cit.*, 178: 》*quam oblationem tu deus in omnibus quaesumus benedictam adscriptam ratam rationabilem acceptabilemque facere dignare quae nobis corpus et sanguis fiat dilectissimi filii tui domini autem dei nostri Iesu Christi qui pridie* 《: 「神よ, わたしたちのためにあなたの最愛の御子わたしたちの主, 神であるイエス・キリストの御からだと御血となるこのささげものを, すべてにおいて祝福された (*benedictam*), 承認を受けた (*ascriptam*), 有効な (*ratam*), 霊的な (*rationabilem*), みこころに適ったもの (*acceptabilem*) としてください。
- [このお方キリストは] 受難の前日 (*Qui pridie*) ……」なお古代および中世の西方諸典礼における聖餐式について H. B. Meyer, *Eucharistie*, *op. cit.*, 152-164. を, R. Meßner の示す「アイルランドおよびアンブロシウスの校訂版」が『ゲラジウス秘跡書』および『グレゴリウス・ハドリアヌス秘跡書』の *Quam oblationem* の前段階を示すことについて J. A. Jungmann, *Missarum sollemnia*, *op. cit.*, II 237. を参照。

- 14) L. C. Mohlberg (Hg.), *Missale Francorum* (RED. F 2), Roma 1957, 32 (Nr. 162). なお写本の成立年代について K. Gamber, *Codices liturgici, op. cit.*, 231 を参照。
- 15) E. A. Lowe (Hg.), *The Bobbio Missal. A Gallican Mass-Book. Text*, London 1920, 11 (Nr. 13). 前半部と後半部とをつなぐ quae は後代の筆記者によって ut に修正されている (ibid. 11, N. B. 10)。写本の年代について K. Gamber, *Codices liturgici, op. cit.*, 168 を参照。
- 16) G. F. Warner, *The Stowe Missal. Vol. II.*, London 1915, 12. 写本の年代について K. Gamber, *Codices liturgici, op. cit.*, 132 を参照。
- 17) O. Heiming (Hg.), *Corpus ambrosiano liturgicum II. Das ambrosianische Sakramentar von Biasca. Die Handschrift Mailand Ambrosiana A24 bis inf. 1. Teil: Text*, Münster 1969, 106 (Nr. 766). 写本の年代について O. Heiming, *ibid.*, XXXV-XLIII; K. Gamber, *Codices liturgici, op. cit.*, 266. を参照。興味深いことに、聖木曜日のミサの奉献文中の Quam oblationem はすでに次の第 4 段階を先取りする文体となっている。) Quam oblationem quam pietati tue offerimus tu deus in omnibus quaesumus + Benedictam + Ascriptam + Ratam rationabilem acceptabilemque facere digneris ut nobis corpus et sanguis [ni] s fiat [di] dilectissimi filii tui domini autem dei nostri Iesu Christi. Qui pridie. . . (ibid. 65 [Nr. 447]) しかしアンブロシウス典礼における秘跡書諸写本の校訂版は、この形態が後代のものであることを示している。Cf. J. Frei, *Das Ambrosianische Sakramentar D 3-3 aus dem Mailändischen Metropolitankapitel. Eine textkritische und redaktionsgeschichtliche Untersuchung der mailändischen Sakramentartradition* (Corpus Ambrosiano-liturgicum III = LQF 56), Münster 1974, 272 (Nr. 665).
- 18) B. Botte, "Rationabilis," *ibid.* /Ch. Mohrmann (ed.), *L'ordinaire de la Messe (EtLi 2)*, Paris-Louvain 1953, 117-122. 119-110.
- 19) これら典礼上の新たな「ガリア・フランク的な」要素、またその社会文化的、神学的背景について H. B. Meyer, *Eucharistie, op. cit.*, 199-204 を参照。ただし十字架のしるし自体はローマ市街区聖堂の典礼を反映する『古ゲラジウス秘跡書』中の「いつくしみ深い父よ (Te igitur)」中に出るものが最古である (*Liber Sacramentorum Romanae Aeclesiae Ordinis anni circuli. In Verb. mit L. Einzenhofer und P. Siffrin hrsg. von L. C. Mohlberg*, Roma 1960 [RED. F 4], 184 [Nr. 1244])。おじぎについては J. A. Jungamann, *Missarum sollemnia, op. cit.*, II 178 をも参照。
- 20) Cf. J. A. Jungmann, *ibid.*, II 179-184.
- 21) Cf. H. B. Meyer, *Eucharistie, op. cit.*, 190. 写本の筆写場所、年代については K. Gamber, *Codices liturgici, op. cit.*, 301 を参照。1650 年頃切り離された『ゲラジウス秘跡書』の最終部は 1921 年 E. A. Lowe により発見された (Paris, Bibliotheque

- Nationale, Cod. Lat. 7193, Foll. 41-56)。Cf. *Liber Sacramentorum Romanae Aeclesiae, op. cit.*, XXIII-XXV.
- 22) Cf. H. B. Meyer, *Eucharistie, op. cit.*, 190-192. 主要写本の年代について J. Deshusses, *Le Sacramentaire Grégorien. Ses principales formes d'après les plus anciens manuscrits. Tome I. (SpicFri 16)*, Fribourg/Suisse 1971, 35-43 を参照。
- 23) 『古ゲラジウス秘跡書』中の十字架のしるしの指示について上記注⑱を参照。
- 24) *Liber Sacramentorum Romanae Aeclesiae, op. cit.*, 185 (Nr. 1248) (『古ゲラジウス秘跡書』); J. Deshusses, *Le Sacramentaire Grégorien, op. cit.*, 88 (Nr. 9) (『グレゴリウス・ハドリアヌス秘跡書』)。
- 25) R. Meßner は博士論文の段階では ut を願望詞 *utinam* と解釈する O. Casel, *Quam oblationem, op. cit.*, 98-99. の説 (この場合祈願文は受納の祈りと変化の祈りの並列とみなされる) を支持するが (R. Meßner, *Meßreform, op. cit.*, 89.), その後発表された *Probleme, op. cit.*, 178-180 では ut を目的の接続詞ととり O. Casel 説はこれを肯定的に紹介するにとどめている。
- 26) Cf. R. Meßner, *Meßreform, op. cit.*, 87-92.
- 27) Cf. *Ibid.*, 91-92. 99.: > . . . Bild und Urbild [sind] durch die Teilhabe des Bildes am Urbild verbunden, sodaß *im* Bild das Urbild real präsent ist. . . (*ibid.* 99) 《東方および西方教父の「しるし」用語を介して理解された聖餐観について J. Betz, *Die Eucharistie in der Zeit der griechischen Väter. I/1. Die Aktualpräsenz der Person und des Heilswerkes Jesu im Abendmahl nach der vorexephinischen griechischen Patristik*, Freiburg 1955, 217-242; A. Gerken, *Theologie der Eucharistie*, München. 1973, 65-95 をも参照。
- 28) A. Hänggi/I. Pahl (ed.), *Præx eucharistica. Textus e variis liturgiis antiquioribus selecti (SpicFri 12)*, Fribourg/Suisse 1968, 130-131 (Nr. 11-12. 14.). 訳は J. Betz, *Eucharistie, op. cit.*, 179; *Ibid.*, “Die Prosphora in der patristischen Theologie,” B. Neunheuser (Hg.), *Opfer Christi und Opfer der Kirche. Die Lehre vom Meßopfer als Mysteriengedächtnis in der Theologie der Gegenwart*, Düsseldorf 1960, 99-116. 109. を参照。
- 30) Cf. R. Meßner, *Meßreform, op. cit.*, 54-55. 89. J. Betz はこの点を次のように的確にまとめている。「ささげものは神のちからに満たされてイエスのからだと血の相 (Erscheinungsbild *ἰσοίωμα*) となる。そしてその (ささげものの) 奉獻がゴルゴタでの出来事のすがた (Abbild) なのである。」(J. Betz, *Eucharistie, op. cit.*, 180-181.)
- 31) V. Saxer, “Figura corporis et sanguinis domini. Une formule eucharistique des premiers siècles chez Tertullien, Hyppolyte et Ambroise,” *RivAC* 47 (1971) 65-89.
- 32) *Ibid.* 78-79. アンブロシウスの「型の論理」の語彙について詳しくは G. Frances-

coni, *Storia e simbolo*. »*Mysterium in figura* (la simbolica storico-sacramentale nel linguaggio e nella teologia di Ambrogio di Milano (RicScT 18), Brescia 1981, 243-269 (figura). 259-262 (figura corporis et sanguinis domini); E. Mazza, *La mistagogia. Una teologia della liturgia in epoca patristica*, Roma 1988, 27-37. 29-31 (figura) をも参照。

- 33) Cf. V. Saxer, *Figura corporis*, op. cit., 80. V. Saxer によるとこの表現はテトウリアヌス、ヒッポリュトス、エルサレムのキュリロス、『エウコロギオン』(ὁμοίωμα 引用箇所参照!) など東方西方の別なく初期キリスト教一般に流布していた聖餐用語であった (ibid. 81)。『デ・サクラメンティス』で引用された奉献文中の figura 自体が古代の表象観における「かたどり」の意味を担っていたことについては疑う余地はない。Cf. J. A. Jungmann, *Missarum sollemnia*, op. cit., II 235.
- 34) *Fid.* 4, 10, 124 (CSEL78, 201, 47-49): Nos autem quotienscumque sacramenta sumimus, quae per sacrae orationis mysterium in carnem transfigurantur et sanguinem, mortem domini adnuntiamus. 「聖なる祈りの秘義により [主の] 肉と血とに変えられる秘跡を受ける度に、わたしたちは主の死を告知らせるのです (1 コリ 11, 26)。」; *Incarn.* 4, 23 (CSEL79, 235, 2-5): Nam etsi credas a Christo carnem esse susceptam et offeras transfigurandum corpus altaribus, non distinguas tamen naturam divinitatis et corporis, et tibi dicitur: Si recte offeras, non recte autem divides, peccasti. 「キリストが肉を受けられたことを信じ, [肉に] 変化すべき [キリストの] からだを祭壇に献げたとしても, [この方の] 神性と人性 (natura corporis) を区別しないならば, あなたは次のように言われるでしょう。『正しく献げるが, 正しく切り分けないならば, お前は罪を犯している (創 4, 7[70 人訳])。』」 Cf. V. Saxer, *Figura corporis*, op. cit., 82.
- 35) Cf. V. Saxer, *ibid.*, 82-83.
- 36) アンブロンシウスの表象観 (Bilddenken) 全般をここで扱うことはできない。ただ A. Gerken, *Theologie der Eucharistie*, op. cit., 86-91 とともに, アンブロンシウスは古代 (東方の) 表象観をラテン人として受容しており, そのため彼の transfigurare の用語には「(古代の) 表象観の枠を越える」(ibid. 91) 面もあったことを指摘するにとどめたい。西方教父が古代の表象観をどのように継承したかについて, W. Dürig, *Imago. Ein Beitrag zur Terminologie und Theologie der römischen Liturgie* (MThS. S 5), München. 1952 をも参照。
- 37) Cf. R. Meßner, *Meßreform*, op. cit., 92. 98; A. Gerken, *Theologie der Eucharistie*, op. cit., 97-100.
- 38) Cf. R. Schieffer, Art. Libri Carolini, LThK 6 (31997) 898-899.
- 40) *MGH. Conc Tomi II Supplementum. Libri Carolini*, Hannover-Leipzig 1924, 199 (Lib. IV. Cap. XIV): » Non enim sanguinis et corporis Dominici mysterium imago iam nunc dicendum est, sed veritas, non umbra, sed corpus, non exemplar

- futuorum, sed id, quod exemplaribus praefigurabatur. Cf. R. Meßner, *Meßreform*, *op. cit.*, 98; A. Gerken, *Theologie der Eucharistie*, *op. cit.*, 100-101.
- 41) この観点からラドペルトゥス (†859 頃) とラトラムヌス (†868 以降) の、聖餐におけるキリストの現存様式を問ういわゆる第一聖餐論争が起こる。論争の性格および経過について R. Meßner, *Meßreform*, *op. cit.*, 93-102; A. Gerken, *Theologie der Eucharistie*, *op. cit.*, 97-111.
- 42) Cf. R. Meßner, *Meßreform*, *op. cit.*, 87-89; *ibid.*, *Probleme*, *op. cit.*, 176-180; O. Casel, *Kultwort*, *op. cit.*, 12-13.
- 43) *Missale Romanum ex decreto sacrosancti concilii Tridentini restitutum summorum pontificum cura recognitum. Editio iuxta typicam*, Ratisbonae 1962, 440. 『グレゴリウス・ハドリアヌス秘跡書』以降のミサ典礼書の発展史をここで詳しく扱うことはできない。これについては H. B. Meyer, *Eucharistie*, *op. cit.*, 204-305 を参照されたい。
- 44) Cf. De labore a Concilio praestando, in: *Enchiridion documentorum instaurationis liturgicae (=EDIL) 1*, 45 (Nr. 191); H. B. Meyer, *Eucharistie*, *op. cit.*, 310. 同評議会召集にいたるいきさつなどは A. Bugnini, *Die Liturgiereform 1948-1975. Zeugnis und Testament. Deutsche Ausgabe hrsg. v. J. Wagner unter Mitarbeit v. F. Raas. Übers. v. H. Venmann*, Freiburg-Basel-Wien 1988 (イタリア語原版 *La riforma liturgica*, Roma 1983), 72-76. 83-85; J. Wagner, *Mein Weg zur Liturgiereform 1936-1986. Erinnerungen*, Freiburg-Basel-Wien 1993, 78-82 を参照。
- 45) 全分科会のリストは A. Bugnini, *op. cit.*, 86-88 に、第 10 分科会の委員名は A. Bugnini, *op. cit.*, 361 (N. B. 1); J. Wager, *op. cit.*, 84 に所収。
- 46) Cf. J. Wagner, *op. cit.*, 85-86. 作業案全体について A. Bugnini, *op. cit.*, 362-365 を参照。
- 47) Cf. J. Wagner, *op. cit.*, 87-92 (ABC 各案の骨子は *ibid.*, 277-278 を参照); A. Bugnini, *op. cit.*, 171-172. 367-370 (ABC 各案の骨子は 368-369. を参照)。
- 48) Cf. J. Wagner, *op. cit.*, 94-95; A. Bugnini, *op. cit.*, 370. 『覚え書き』のイタリア語原版は J. Wagner, "Zur Reform des Ordo Missae. Zwei Dokumente," P. Jounel/R. Kaczynski/G. Pasqualetti (ed.), *Liturgia. Opera divina e umana. Studi sulla riforma liturgica offerti a S. E. Mons. Annibale Bugnini in occasione del suo 70° compleanno*, Roma 1982, 263-289, 267-288. ドイツ語版は J. Wagner, *Mein Weg*, *op. cit.*, 258-281.
- 49) Cf. J. Wagner, *Mein Weg*, *op. cit.*, 95; A. Bugnini, *Liturgiereform*, *op. cit.*, 371. 返書の原版は J. Wagner, *Zur Reform*, *op. cit.*, 289. ドイツ語版は J. Wagner, *Mein Weg*, *op. cit.*, 282.
- 50) Cf. J. Wagner, *Mein Weg*, *op. cit.*, 88. 90. 95-100; *ibid.*, "Neue eucharistische

- Hochgebete.” Gottesdienst 2 (1968) 97-99.
- 51) Cf. J. Wagner, *Mein Weg*, op. cit., 126-131; A. Bugnini, *Liturgiereform*, op. cit., 384-385. 390-399. 485-486.
- 52) *Missale Romanum ex decreto Sacrosancti Oecumenici Concilii Vaticani II instauratum auctoritate Pauli Pp. IV promulgatum. Ordo Misae. Editio typica*, Vaticano 1969.
- 53) *Missale Romanum ex decreto Sacrosancti Oecumenici Concilii Vaticani II instauratum auctoritate Pauli Pp. IV promulgatum. Editio typica*, Vaticano 1970, op. cit., (Editio typica altera 1975).
- 54) J. A. Jungmann による ABC の 3 つのローマ奉献文改訂案 (1965 年) にも変更予定はなかったようである。
- 55) *Missale Romanum* [ . . . ], Vaticano 1970, op. cit., 450-1.
- 56) Cf. AAS 59 (1967) 442-448: } 11. b) unicum signum crucis facit super oblata, ad verba *benedictas + haec dona, haec munera, haec sancta sacrificia illibata*, in oratione Te igitur. Cetera signa crucis super oblata omittuntur. (《ibid. 445》)
- 57) 『第二一般指針』発表の 2 週間後 (5 月 18 日), この指針が要請するミサ儀式の変更箇所が補足発表された (『ミサ儀式の変更』 *Variationes in Ordinem Missae inducendae ad normam Instructiones S. R. C. diei 4 maii* 1967, Vaticano 1967) が, ここに *Quam oblationem* が手を合わせたまま唱えられることが明記されている (ibid. 19: } Nr. 36. *Manibus iunctis, prosequitur: Quam oblationem. . .*) (Cf. H. Rennings, “Die Änderungen im Ritus der Meßfeier ab 29. 6. 1967. Tebellarische Übersicht,” Gottesdienst Vorausnummer (29. 6. 1967) 2: } Keine Kreuzzeichen mehr beim *Quam oblationem . . .* und *Benedixit*. Hände werden gefaltet. (当時 (『第二一般指針』発効前) 有効であった挙式法第 35 および 36 項は次のように規定していた (典礼注記は斜体で記す)。) *Tenens manus expansas super oblata, dicit: Hanc igitur [ . . . ] Iungit manus. Per Christum Dominum nostrum. Amen. Quam oblationem [ . . . ]*. (Cf. *Ordo Missae, Ritus servandus in celebratione Missae et De defunctibus in celebratione Missae occurrentibus. Editio typica*, Vaticano 1965, 19. 45-46. 共同司式の際には次の規定が相当した。) *Ab Hanc igitur usque ad Supplices inclusive, omnes concelebantes omnia simul cantu proferunt aut elata voce dicunt, hoc modo: a) Hanc igitur manibus ad oblata extensis, quas ad verba Per Christum Dominum nostrum iungunt; b) Quam oblationem, Qui pridie, Simili modo manibus iunctis, et caput inclinantes ad verba gratias agens; [ . . . ]* (Cf. *Ritus servandus in concelebratione Missae et Communionis sub utraque specie*, Vaticano 1965, 22 (Nr. 39 a-b); F. Kruse, *Der neue römische Ritus der heiligen Messe sowie die Feier der Konzelebration und der Kommunion unter beiden Gestalten*, Köln 1965, 27-28. 63.

58) この点に関して『ミサ典礼書の総則 (Institutio generalis Missalis Romani)』の5つの草稿が興味深い情報を提供してくれる。奉献文の構成要素を記す同総則の第55項は、1968年7月15日の第5草稿の段階まで(聖別前のいわゆる「聖別エピクレシス」と聖別後の「交わりエピクレシス」との両者に言及しつつも)エピクレシスの項を制定報告の項(55c)の後に置いていた(55f)。おそらくその後、一方で、聖別前の聖別エピクレシスの特徴がより明確に出る新奉献文への配慮から、他方で、*Quam oblationem* がローマ奉献文特有の(聖別前の)聖別エピクレシスであるとの姿勢をより前面に出す目的もあって、これが制定報告の項(55d)の前に置き換えられた(55c)のであろう。したがって「両手を延べる典礼動作」の*Quam oblationem* への移動もおそらくこの時期の発案と思われる(この典礼動作が聖別エピクレシスを表現するものであることについては後述する)。いずれにせよ両者の変更は1969年4月6日の『ミサ儀式書 (Ordo Missae)』、すなわち同総則の公刊の段階になって初めて実施されている。『ミサ典礼書の総則』第55項の草稿および発展史について B. Kleinheyer, “Artikel 55 der Allgemeinen Einführung in das Römische Meßbuch zu Anamnese und Epiklese des Eucharistiegebetes, in: *Gratias agamus*,” *Studien zum eucharistischen Hochgebet (FS B. Fischer) hersg. v. A. Heinz u. H. Rennings*, Freiburg-Basel-Wien 1992, 167-181の特に168-172頁を参照。

70) 例えば第10分科会でも指導的な役割を果たした J. A. Jungmann がこの立場をとっている。Cf. J. A. Jungmann, *Missarum sollemnia, op. cit.*, II 234-243: } Die Formel stellt die Wandlungsbite oder — auf das Wesen der Sache gesehen — die Wandlungsepiklese der römischen Messe dar. ((*ibid.* 238) ただし J. A. Jungmann は *Te igitur* にも聖別エピクレシスの兆しを認める。Cf. *ibid.*, II 185-190.: } In der Segnungsbite ist, genau angenommen, bereits die Bitte um die Verwandlung eingeschlossen. Sie ist insofern schon der Ansatz zu einer Epiklese, ähnlich wie sie in manchen Secretaformeln vorliegt, und wie sie im *Quam oblationem* förmlicher und breiter erscheinen wird. ((*ibid.* 188) さらに、1967年3月以降第10分科会の委員となった (Cf. A. Bugnini, *Liturgiereform, op. cit.*, 361) L. Bouyer は、ローマ奉献文の *Quam oblationem* と *Hanc oblationem* はシナゴグ典礼の影響を受けており (Schemoneh Esreh のうち *Tefillah* および *Abodah* に相当)、ともに聖別前の「第一エピクレシス」を形成していると考えていた。Cf. L. Bouyer, *Eucharistie. Théologie et spiritualité de la prière eucharistique*, Tournai 1966, 78-80. 216-217. 232-233.: } Les deux dernières prières que nous avons citées, *Hanc oblationem* et *Quam oblationem*, forment ensemble la première épiklèse de la liturgie romaine. [. . .] Ici, les deux prières restent distinctes aussi, mais elles sont jointes immédiatement, comme l'étaient, dans la *Tefillah*, la seizième bénédiction, où toutes les demandes d'Israël sont comme

recueillies pour être recommandées à Dieu, et la bénédiction *Abodah*, qui lui recommande ses sacrifices eux-mêmes. 《(*ibid.* 232-233)これについて R. Meßner, *Problem.*, *op. cit.*, 188-189 も参照。

- 71) Cf. R. Meßner, *Probleme*, *ibid.*, 186-187. これについて当初より第10分科会の委員を務めた P. Jounel の論文“La composition des nouvelles prières eucharistiques,” *MD* 94 (1968) 38-76. 40. 42 をも参照。典礼刷新委員会 (1948年5月28日教皇ピウス12の任命により発足)のメンバーで(1960年以降 Cf. A. Bugnini, *Liturgiereform*, *op. cit.*, 979)後に典礼聖省の顧問をも務めた (Cf. *ibid.*, 997) C. Braga も次のように書いている。 . . . necessitatis essentialis inserendi precem deprecatoriam ad consecrationem (epiclesim) ante narrationem institutionis. . . 《C. Braga, “De novis precibus eucharisticis liturgiae latinae,” *EL* 82 (1968) 216-238. 223. なお J. Wagner, *Mein Weg*, *op. cit.*, 97 も「ローマの特質」に言及している。
- 72) Cf. R. Meßner, *Probleme*, *ibid.*, 187-188; L. Bouyer, *Eucharistie*, *op. cit.*, 199-201. 204. 217. 『デル・パリゼー写本』の奉献文は A. Hänggi/I. Pahl (ed.), *Præx eucharistica*, *op. cit.*, 124-127 を参照。
- 73) Cf. R. Meßner, *Probleme*, *ibid.*, 187-189; アレクサンドリア典礼のエピクレーシスについて *Ibid.*, *Meßreform*, *op. cit.*, 74-78 を参照。「分割されたエピクレーシス」の問題については以下を参照。R. Albertine, “Problem of the (Double) Epiclesis in the New Roman Eucharistic Prayers,” *EL* 91 (1977) 193-202. 194-195; *ibid.*, “The Epiclesis Problem — The Roman Canon (Canon I) in the Post-Vatican Liturgical Reform,” *EL* 99 (1985) 337-348; *ibid.*, “The Post-Vatican Consilium’s (Coetus X) Treatment of the Epiclesis Question in the New Eucharistic Prayers,” *EL* 100 (1986) 489-507; *ibid.*, “The Post-Vatican Consilium’s (Coetus X) Treatment of the Epiclesis Question in the Context of Select Historical Data (Alexandrian Family of Anaphoras) and the Fragment of 《Der Balyzeh》,” *EL* 102 (1988) 385-405; K. -W. de Jong, “Questions à propos de la double épiclese, en particulier dans les prières eucharistiques II-IV,” *QL* 68 (1987) 256-276; A. Gerhards, “Entstehung und Entwicklung des Eucharistischen Hochgebetes im Spiegel der neuen Forschung. Der Beitrag der Liturgiewissenschaft zur liturgischen Erneuerung,” *Gratias agamus*, *op. cit.*, 75-96. 84.
- 74) E. J. Lengeling, *Die neue Ordnung der Eucharistiefeier. Allgemeine Einführung in das römische Meßbuch. Entgeltiger lateinischer und deutscher Text. Einleitung und Kommentar (RLGD 17/18)*, Münster<sup>3</sup>1971, 234.
- 75) E. J. Lengeling, “Demonstrativ oder epikletisch? Mißverständnis in der Konzelebrationspraxis (2),” *Gottesdienst* 9 (1975) 44-45. ただし *Hanc igitur* に置かれた両手を延べる動作は、導入当時は必ずしもエピクレーシスとしては理解され



ていなかっただらしい。この動作の指示は14世紀以降のミサ典礼書に頻出するが、元来「Hanc (この)」という指示語を強める意味があったという。これについて J. A. Jungmann, *Missarum sollemnia, op. cit., II* 233-234; L. Eisenhofer, *Handbuch der katholischen Liturgik. 2Bde.*, Freiburg 1933, II 179-180.

- 77) Cf. R. Meßner, *Probleme, op. cit.*, 184-185. 各国語版は以下を参照。 *Missel Romain*, Paris 1974, 104: › Sanctifie pleinement cette offrande par la puissance de ta bénédiction, rends-la parfaite et digne de toi: qu'elle devienne pour nous le corps et le sang de ton Fils bien-aimé, Jésus Christ, notre Seigneur. (仏)﴿; *Missale Romano. Riformato a norma dei decreti del Concilio Ecumenico Vaticano II e promulgato da Papa Paolo VI.*, Vaticano<sup>2</sup>1983, 387: › Santifica, o Dio, questa offerta con la potenza della tua benedizione, e degnati di accettarla a nostro favore, in sacrificio spirituale e perfetto, perché diventi per noi il corpo e il sangue del tuo amatissimo Figlio, il Signore nostro Gesù Cristo. (伊)﴿; *Misal Romano. Reformado por mandato del Concilio Vaticano II y promulgado por su santidad el Papa Pablo VI.*, Madrid 1988, 515: › Bendice y santifica, oh Padre, esta ofrenda, haciendola perfecta, espiritual y digna de ti, de manera que sea para nosotros Cuerpo y Sangre de tu Hijo amado, Jesucristo, nuestro Señor. (西)﴿; *The Roman Missal. Revised by Decree of the Second Vatican Council and Published by Authority of Pope Paul VI.*, Dublin 1974, 488: › Bless and approve our offering; make it acceptable to you, an offering in spirit and in truth. Let it become for us the body and blood of Jesus Christ, your only son, our Lord. (英)﴿; *Die Feier der heiligen Messe. Messbuch. Für die Bistümer des deutschen Sprachgebietes. Authentische Ausgabe für den liturgischen Gebrauch, hrsg. im Auftrag der Bischofskonferenzen Deutschlands, Österreichs und der Schweiz sowie der Bischöfe von Luxemburg, Bozen-Brixen und Lüttich*, Einsiedeln u. a. 1975, Teil I 162, Teil II 472: › Schenke, o Gott, diesen Gaben Segen in Fülle und nimm sie zu eigen an. Mache sie uns zum wahren Opfer im Geiste, das dir wohl gefällt: zum Leib und Blut deines geliebten Sohnes, unseres Herrn Jesus Christus. (独)﴿
- 78) R. Meßnerによると、1952年にJ. A. Jungmannの監修のもとドイツ典礼委員会により提案されたローマ奉献文訳では、前半後半部をそれぞれ独立した2文として扱っており、より適切であったという。Cf. R. Meßner, *Probleme, op. cit.*, 185 (N. B. 37). 1952年版は次のような訳になっている。 *Neue deutsche Übersetzung des Kanons. Ein Vorschlag der Liturgischen Kommission*, LJ 2 (1952) 135-139, 137: › Laß diese Gaben, wir bitten dich, o Gott, in allem gesegnet, geweiht und gebilligt sein, geistig und Deiner würdig. Laß sie uns werden Leib und Blut Deines vielgeliebten Sohnes, unseres Herrn Jesus Christus. ﴿

- 80) R. Meßner, *Probleme*, *ibid.*, 184.
- 81) J. A. Jungamann, *Missarum sollemnia*, *op. cit.*, II 239 によると、典礼伝承は神のちからのはたらきかけを「神の霊」「神の恵み」の他「祝福 Segen」の語でも表現することがある。H. Lietzmann, *Messe und Herrenmahl. Eine Studie zur Geschichte der Liturgie (AKG 8)*, Berlin<sup>3</sup>1955, 96-97. 119 によると、古ガリア典礼の『ゴート・ミサ典礼書』(Vat. Reg. lat. 317, 8世紀初頭)は、制定報告前にローマ奉献文の *Quam oblationem* と並行するエビクレーシスの祈りを置くが、この中ではささげもの上に「祝福」「聖化」ひいては「聖霊の露」を求めるものもある。》[Nr. 280] *CONTESTATIO*. [. . .] *Et nunc domine, sancte pater, omnipotens aeternae deus, supplicis dipraecamur, uti hanc oblationem benedicere et sanctificare digneris: per Christum dominum nostrum.* [Nr. 281] *POST SANCTUS*. . . *Qui pridie quam pateretur* 《in: L. C. Mohlberg (Hg.), *Missale Gothicum (RED. F 5)*, Roma 1961, 72-73; 》 [Nr. 271] *POST SANCTUS*. [. . .] *Te oramus, uti hoc sacrificium tua benedictione benedicas, et spiritus sancti tui rore perfundas, ut sit omnibus legitima eucharistia: per Christum dominum nostrum. Qui pridie.* 《in: L. C. Mohlberg (Hg.), *Missale Gothicum, ibid.*, 69-70. 写本の年代について Gamber, *Codices liturgici, op. cit.*, 161-162 を参照。
- 82) Cf. O. Casel, “*Oblatio rationabilis*,” *ThQ* 99 (1917/8) 429-439; *ibid.*, *Quam oblationem*, *op. cit.*, 99-101; *ibid.*, “*Die Λογικὴ θυσία* der antiken Mystik in christlich-liturgischer Umdeutung,” *JLw* 4 (1924) 37-47; *ibid.*, *Kultwort* 1-19.
- 83) Cf. O. Casel, *Oblatio rationabilis*, *op. cit.*, 431-434; *ibid.*, *Λογικὴ θυσία*, *op. cit.*, 37-39; *ibid.*, *Kultwort.*, *op. cit.*, 1-2.
- 84) Cf. H. M. Kleinknecht, Art. *Der λόγος* im Hellenismus, in: *ThWNT IV* (1942, Druck 1966) 83-86. 83-84; H. Kuhn, Art. *Logos. I. Philosophisch*, in: *LThK 6* (1961) 1119-1122. 1121-1122; J. Hirschberger, *Geschichte der Philosophie. I. Altertum und Mittelalter*, Freigurg/Br.<sup>7</sup>1963, 247-275. 254. 264. 272; U. Wilkens, *Der Brief an die Römer. 3. Teilband. Röm 12-16 (EKK VI/3)*, Zürich-Einsiedeln-Köln u. a. 1982, 4-7. 5; M. Enders, Art. *Logos. I. Philosophisch*, in: *LThK 6* (<sup>3</sup>1997) 1025-1026. 1026.
- 85) O. Casel, *Λογικὴ θυσία*, *op. cit.*, 40; *ibid.*, *Kultwort.*, *op. cit.*, 2.
- 86) *Corpus Hermeticum I*, 31, A. D. Nock/A. -J. Festugière, *Hermès Trismégiste. Corpus Hermeticum. Tome I. Traités I-XII*, Paris 1960, 19. 訳は *ibid.*, 18 の他, U. Wilkens, *op. cit.*, 5 をも参照。
- 87) *Ode 20*, M. Lattke, *Die Oden Salomons in ihrer Bedeutung für Neues Testament und Gnosis. Band I. Ausführliche Handschriftenbeschreibung. Edition mit deutscher Parallel-Übersetzung u. a. (OBO 25/1)*, Freiburg/Schweiz 1979, 130. 訳は *ibid.* 131 の他, *Ibid.*, *Oden Salomos. Übers. u. eingeleitet*

- v. M. Lattke (FC 19), Freiburg-Basel-Wien 1995, 156 によった。U. Willkens, op. cit., 5 は「彼の思いのささげもの (das Opfer seines Denkens: M. Lattke)」を「彼の霊のささげもの (sein geistiges Opfer)」とする訳を採用する。
- 88) O. Casel, *Λογική θυσία*, op. cit., 39.
- 89) Philo, *De specialibus legibus. I. 277*, L. Cohn, *Philonis Alexandrini opera quae supersunt. Vol. V.*, Berlin 1906, 66-67. 訳は L. Cohn/I. Heinemann/M. Adler/W. Theiler (hrsg.), *Philo von Alexandria. Die Werke in deutscher Übersetzung. Bd. II*, Berlin<sup>2</sup> 1962, 88 の他 U. Willkens, op. cit., 6 をも参照。
- 90) Cf. U. Willkens, op. cit., 6. ロマ 12, 1 における *λογικός* について G. Kittel, Art. *λογικός*, in: ThWNT IV (1942, Druck 1966) 145-147. をも参照。
- 91) Cf. U. Willkens, op. cit., 6-7; H. Schlier, *Der Römerbrief (HThK VI)*, Freiburg-Basel-Wien<sup>2</sup> 1979, 350-358. 356-358.
- 92) Cf. K. H. Scheikle, *Die Petrusbriefe. Der Judasbrief (HThK XIII/2)*, Freiburg-Basel-Wien<sup>5</sup> 1980, 54-59. 55-56. 1 ペト 2, 2 における *λογικός* について G. Kittel, Art. *λογικός*, op. cit., 145-147. をも参照。
- 93) Cf. N. Brox, *Der erste Petrusbrief (EKK XXI)*, Zürich-Einsiedeln-Köln u. a. 1979, 92-93.
- 94) Cf. O. Casel, *Λογική θυσία*, op. cit., 43; R. Meßner, *Probleme*, op. cit., 176-177; *Ibid.*, *Meßreform*, op. cit., 60. 古代東方教父ならびに典礼伝承は、ギリシア神秘哲学の影響の下に *λογικός* を *πνευματικός* の同義語として用いている。1 ペト 2, 2 の同 2, 5 との呼応もこの類義関係に基づいている。これについて O. Casel, *Kultwort*, op. cit., 2 (特に N. B. 2). を参照。また、古代東方神学に浸透していた霊キリスト論により、ロゴスと聖霊との区別がはっきりとは意識されていなかったことをも考慮する必要があるであろう。ロゴスと聖霊との(位格上の)区別は、コンスタンティノポリス公会議(381年)において pneuma マコイ派への対抗措置として信条に聖霊の神性と自立性が盛り込まれて以来、次第に意識されるようになったものである。これについて J. Betz, *Eucharistie*, op. cit., 260-292. 334-342. を参照。この4世紀の教理上の発展が(聖別のための)聖霊エピクレシスを生む一因となったことについて R. Taft, "From logos to spirit: On the early history of the epiclesis," *Gratias agamus (FS B. Fischer)*, op. cit., 489-502. をも参照。
- 95) R. Meßner, *Probleme*, *ibid.*, 177.
- 96) Justinus, *Dialogos, 117, 2-3*, E. J. Goodspeed, *Die ältesten Apologeten. Texte mit kurzen Einleitungen*, Göttingen 1914, 234-235. 訳は A. Hänggi/I. Pahl (ed.), *Præx eucharistica*, op. cit., 75 ならびに Ph. Haeuser, *Justinus. Dialog. Pseudo-Justinus. Mahnrede (BKV 33)*, München. 1917, 190 を参照。
- 97) Justinus, *Apologia I 66, 2*, E. J. Goodspeed, *Apologeten*, op. cit., 74-75. 訳は A. Hänggi/I. Pahl (ed.), *Præx eucharistica*, op. cit., 71; H. B. Meyer, *Eucharistie*, op.

- cit.*, 101 を参照。「ロゴス [の降下ををを求める] 祈り」以下の文の意味は議論の余地がある。これについて J. Betz, *Eucharistie, op. cit.*, 270-272 (特に注 32) を参照。本稿におけるこの部分の訳は J. Betz 説に従っている。
- 98) Cf. O. Casel, *Kultwort, op. cit.*, 2-3. ἀναίμακτος はその他 πνευματικός (霊的な) あるいは καθάρος (清らかな) と結びつくこともあった (*ibid.* 3-4.)。
- 99) *Constitutiones Apostolorum VI 23, 5*, M. Metzger (ed.), *Les constitutions Apostoliques. Tome II. (SC 329)*, Paris 1986, 372. 訳は *ibid.*, 373 を参照。
- 100) A. Hänggi/I. Pahl (ed.), *Prex eucharistica, op. cit.*, 116. 訳は *ibid.*, 117 を参照。このバビルス断片の年代について H. B. Meyer, *Eucharistie, op. cit.*, 99; G. J. Coming, *The Liturgy of St. Mark (OCA 234)*, Roma 1990, XXIII-XXVII を参照。4 世紀以降のマルコ奉獻文では θναίαν の語が欠落しており, λογικήν は λατρείαν に係る結果となっている (A. Hänggi/I. Pahl [ed.], *Prex eucharistica, op. cit.*, 102.)。
- 101) F. E. Brightman, *Liturgies Eastern and Western. Being the Texts Original or Translated of the Principal Liturgies of the Church. I. Eastern Liturgies*, Oxford 1896, 319. 訳は *Liturgie. Die Göttliche Liturgie der orthodoxen Kirche. Deutsch-Griechisch-Kirchenslawisch. hrsg. v. A. Kallis*, Mainz 1993, 204 を参照。
- 102) A. Hänggi/I. Pahl (ed.), *Prex eucharistica, op. cit.*, 230. 訳は *ibid.*, 231 の他 *Göttliche Liturgie, op. cit.*, 206 をも参照。
- 103) A. Hänggi/I. Pahl (ed.), *Prex eucharistica, op. cit.*, 208. 訳は *ibid.*, 209. の他 *Cyrril von Jerusalem. Mystagogische Katechesen. Übers. u. eingel. v. G. Rowekamp (FC 7)*, Freiburg/Br. 1992, 153 をも参照。
- 104) Cf. O. Casel, *Kultwort, op. cit.*, 2; Ch. Mohrmann, “RATIONABILIS-ΔΟΦΙΚΟΣ,” *ibid.*, *Études sur latin des chrétiens. I.*, Paris 1958, 179-187; B. Botte, *Rationabilis, op. cit.*, 121. 批判校訂版がすでに公刊済みの 1 ベト 2, 2 の古ラテン語訳によると, τὸ λογικὸν ἄδολον γάλα の訳は *rationabile [et] innocens lac, rationabiles [et] sine dolo lac, rationale [et] sine dolo lac* などとなっている。Cf. VL 26/1 (Hg. W. Thiele, Freiburg 1956-1967) 96-97.
- 105) Cf. O. Casel, *Kultwort, op. cit.*, 6-9. 15-16.
- 106) *Sacr.* 4, 6, 27 (CSEL 73, 57, 4-7). 訳はアンブロシウス『秘跡』, 前掲書, 117 頁の他, *Ambrosius. De sacramentis (FC 3), op. cit.*, 153; *Ambroise de Milan. Des sacraments (SChr 25bis), op. cit.*, 117. をも参照。
- 107) Cf. O. Casel, *Kultwort, op. cit.*, 13-14 (特に N. B. 26).
- 108) *Liber Sacramentorum Romanae Aecclesiae, op. cit.*, 185 (Nr. 1250). ただし 8 世紀初頭の『ゴート・ミサ典礼書』の祈願文では『デ・サクラメンティス』の 3 つの形容詞が *rationabilis* も含めそのまま伝承されているのをみることができる。[Nr. 527] POST SECRETA. Memores gloriosissimi domini passionis et ab

inferis resurrectionis offerimus tibi, domine, hanc immaculatam hostiam, rationalem hostiam, incruentam hostiam, hunc panem sanctum et calicem salutarem obsecrantes, ut infundere digneris spiritum tuum sanctum, edentibus nobis uitam aeternam regnumque perpetuum conlatura potantibus: per. (in: L. C. Mohlberg (Hg.), *Missale Gothicum, op. cit.*, 120. Cf. O. Casel, *Kultwort, op. cit.*, 13 (N. B. 26). なお本稿は hostia, oblatio ともに「ささげもの」という訳で統一したが、ここでは hostia に意味の比重がかかっているを示すため「いけにえ」とした。

- 109) O. Casel は 1931 年に発表された論文で *rationabilis* が *Quam oblationem* の伝承過程の後期に挿入されたものとみているが (O. Casel, *Kultwort, ibid.* 9-11.), これは彼が『デ・サクメンティス』の *Quam oblationem* の引用にあたり、注釈付きながら *ratus* の語をも本文に採用したサン・モール会版 (PL 16, 443B) に依拠したことと、*rationabilis* を除いた 3 つが (*adscriptus*, *ratus*, *acceptabilis*) この祈願文の法的性格を強調する形容詞句としてよくまとまっているため、*rationabilis* を異分子とみなしたことに原因がある。しかしその後刊行された『デ・サクラメンティス』の批判校訂版はいずれも、写本伝承の支持の少ない *ratus* を本文から外しており、その結果形容詞は *scriptus*, *rationabilis*, *acceptabilis* の 3 つの組み合わせとなっている。Cf. *CSEL* 73, 55, 3 (O. Faller 版); *SChr* 25bis, 114, 3-4 (B. Botte 版); *FC* 3, 148, 7-8 (O. Faller/J. Schmitz 版); *Sancti Ambrosii Episcopi Mediolanensis Opera* 17, 96, 3 [*Sacr.* 4, 5, 21] (Milano-Roma 1982; O. Faller/G. Banterle 版)。*Ratam* はむしろ、すでに *rationabilis* が *λογικὸς* の訳語としての意味を失っていた時期に、この語の意味(「ふさわしい」ほどの意味であったと思われる)を補完するために書き加えられたものであろう (*Quam oblationem* の伝承史の第二段階を示す *Cod. Toledo* 35. 4 を参照。そこでは *benedictus*, *ratus*, *rationabilis* の組み合わせとなっている。ちなみに『デ・サクラメンティス』の写本中 *ratam* を採用するものはいずれも 11 世紀にさかのぼる。Cf. *CSEL* 73, 14. 55 [批判考証資料].)。なお形容詞の 3 連続は古代ローマではよく好まれた修辞法であった。これについて、O. Casel, *Kultwort, ibid.*, 4; B. Botte, *Rationabilis, op. cit.*, 119-120. の他、A. Baumstark, “Antik-roemischer Gebetsstil im Messkanon,” *Miscellanea liturgica in honorem L. C. Mohlberg I.* (BEL 22), Roma 1948, 301-331. 319-324. をも参照。
- 110) J. -P. Bouhot, “Les sources de l’*Expositio missae* de Remi d’Auxerre,” REAug 26 (1980) 118-169. 164 (Missa, ut beatus Isidorus dicit, 11):

》Hucusque obsecratio, hinc sequitur consecratio, ita incipiens: *Quam oblationem*, et pertingit usque: *nobis quoque peccatoribus. Benedictam facere digneris*, ut tu benedicere eam digneris; [...] *rationabilem*, ille quidem panis et illud uinum per se irrationabile est, sed orat sacerdos ut ab illo rationabiliter

tractatus et ab omnipotenti Deo consecratus, rationabilis fiat, transeundo in corpus eius filii, *ut nobis*, id est ad nostram salutem *fiat corpus et sanguis dilectissimi filii tui*, quia in ueritate post consecrationem uerum corpus Christi et uerus sanguis est. 《Cf. R. Meßner, Probleme, op. cit., 181.》

- 111) Cf. R. Meßner, *ibid.*, 180-181. ここで問題となる *rationabilis* および *rationabiliter* の意味は取りにくい。これについて R. Meßner, *ibid.*, 181. の他 O. Casel, *Kultwort*, op. cit., 17. をも参照。*Rationabilis* の用法について、オセールのヘイリクス (†876/877) の『論集 (Collectanea)』からの「秘義について」と題する一節が参考になろう。主張の背後に *Quam oblationem* の祈願文を読みとることができる。R. Quadri, *I collectanea di Eirico di Auxerre (SpicFri II)*, Friburgo/Svizzera 1966, 122: 》 [DE SACRAMENTO . . .] *Sicut corpus Christi, quod de Maria tulit, rationabile fuit, constans ex carne et anima, ita et corpus illud, quod conficitur in Ecclesia a sacerdotibus, fit omnino rationabile, quia ad invocationem sacerdotis et Spiritus Sancti praesentiam, eadem divinitate repletur, qua corpus Christi repletum fuit ab ipsa conceptione. Quanto enim maior est divinitas Christi quam anima rationabilis hominis, tanto et rationabilior. Et quemadmodum ipsum Christi corpus non fuit phantasticum, sed verum et rationabilitatis capax, ita et oblatio a sacerdotibus consecrata non phantastice dicitur corpus Christi, sed vere corpus illius esse constat, id est eius divinitate plenum.* (l. 13-22) 《「マリアから受けられたキリストのからだは肉と魂からなる理性ある [からだ] であったように、教会において司祭によってつくられるかのからだも全く理性ある [からだ] となる。なぜなら、司祭の祈願と聖霊の臨在により、[ささげものは、] それによってキリストのからだが生胎のときより満たされていたかの同一の神性に満たされるからである。キリストの神性は理性ある人間の魂よりも偉大であり、いわんやより理性的なのである [から]。キリストご自身のからだは幻想ではなく真実であり、理性を備えた [からだ] であったように、司祭により聖別されたささげものも、幻想としてキリストのからだといわれるのではない。むしろ真に彼のからだ、すなわち彼の神性に満たされた [からだ] なのである。」 Cf. J. -P. Bouhot, *Les sources, op. cit.*, 165 (N. B. 1).

112) Cf. O. Casel, *Kultwort*, op. cit., 18-19.

- 113) L. C. Mohlberg (Hg.), *Sacramentarium Veronense (RED. F I)*, Roma 1956, 25 (Nr. 201). 28 (Nr. 216): 》 *Propitius, domine, quaesumus, haec dona sanctifica, et hostiae spiritalis oblatione suscepta nosmet ipsos tibi perfice munus aeternum: per.* 《教皇レオ一世 (在位 440-461 年) の頃の作とされる (cf. *ibid.*, LXXI. LXXXII.)。なお以下の *hostia*, *munus* および *sacrificium* の訳語について J. A. Jungmann, *Missarum sollemnia, op. cit.*, II 117. 189-190; *ibid.*, “Oblatio und Sacrificium in der Geschichte des Eucharistieverstandnisses,” *ZKTh* 92 (1970)

- 342-350を参照。
- 114) *Sacramentarium Veronense, ibid.*, 33 (Nr. 253): ›Remotis obumbrationibus carnalium uictimarum spiritalem tibi, summe pater, hostiam supplici seruitate deferimus, [. . .] 《作成年代は教皇ヒラルス（在位 461-468 年）以降 6 世紀初頭まで、あるいは 500 年以降と推定されている (cf. *ibid.*, LXXIV. LXXVIII. LXXXII)。
- 115) *Sacramentarium Veronense, ibid.*, 159 (Nr. 1246): ›Munus populi tui, domine, placatus intende, quo non altaribus tuis ignis alienus, nec inrationabilium cruor effunditur animantum; sed sancti spiritus operante uirtute sacrificium iam nostri corpus et sanguis est ipsius sacerdotis: per. 《アウグスティヌス (†430) の影響を受けた者、おそらく教皇ゲラシウス 1 世（在位 492-496 年）の作とされる (cf. *ibid.*, LXX-LXXI. LXXXV)。
- 116) J. A. ユングマン『ミサ』（福地幹男訳、オリエンズ宗教研究所、1992 年）132-145 頁、特に 136 頁参照。なお本書は未出版のドイツ語原稿からの訳である（英語訳は J. A. Jungmann, *The Mass: an Historical, theological, and pastoral survey. Transl. by J. Fernandes. Ed. by M. E. Evans, Colledgeville 1976.*）。キリストの十字架上の奉献とキリスト者（教会）の奉献との関係についてさらに、*Das Opfer der Kirche. Exegetische, dogmatische und pastoraltheologische Studien zum Verständnis der Messe dargeboten von R. Erni, A. Gugler, H. Haag [u. a.]: Professoren und Dozenten von der Theologischen Fakultät Luzern (Luzerner Theologische Studien 1)*, Luzern 1954; R. Schulte, *Die Messe als Opfer der Kirche. Die Lehre frühmittelalterlicher Autoren über das eucharistische Opfer (LQF 35)*, Münster 1959; B. Neunheuser (Hg.), *Opfer Christi und Opfer der Kirche*, op. cit.; K. Rahner/A. Häussling, *Die vielen Messen und das eine Opfer (QD 31)*, Freiburg-Basel-Wien 1966; O. Casel, *Das christliche Opfermysterium. Zur Morphologie und Theologie des eucharistischen Hochgebetes hrsg. v. V. Warnach*, Graz-Wien-Köln 1968; J. A. Jungmann, *Oblatio und Sacrificium*, op. cit.; *Das Opfer Jesu Christi und seine Gegenwart in der Kirche. Klärungen zum Opfercharakter des Herrenmahles hrsg. v. K. Lehmann u. E. Schlink (DiKi 3)*, Freiburg/Br. u. Göttingen 1983. などを参照。
- 117) すでにリヨンのフロールス (†860 頃) の『ミサ注解』にもこの見解があらわれる。Cf. P. Duc (ed.), *Étude sur l'Expositio Missae de Florus de Lyon, suivie d'une édition critique du texte*, Belley 1937, 131 (Expositio Missae 59, 1): ›*Quam oblationem tu*, etc. usque ad: *dilectissimi Filii tui Jesu Christi Domini nostri. Oratur Omnipotens Deus ut oblationem suis sacris altaribus impositam et tantis precibus commendatam, ipse per virtutem spiritus descendentis ita legitimam et perfectam eucharistiam efficiat.* . . . 《「Quam oblationem tu 以下, dilectissimi Filii tui Jesu Christi Domini nostri まで。〔この祈願で,〕 聖なる祭壇の上に置か

れ、たえなる祈願によって〔神に〕委ねられたささげものを、〔神〕ご自身が、降下する霊のちからによって正しく完全なエウカリスティアとなさるようにと、全能の神に祈られる。」； ibid. 132 (Expositio Missae 59, 9): 》Hoc corpus et hic sanguis non in spicis et in sarmentis colligitur, sed certa consecratione mysticus fit. Nobis non nascitur, cum panis et vini creatura in sacramentum carnis et sanguinis ejus ineffabili Spiritus sanctificatione transfertur. 《「このからだ、この血は、麦の穂とぶどうの蔓のうちから集められるのではなく、確かな聖別によって秘義の〔からだ〕となる。これはわたしたちのために生まれるようなもの（被造物）ではない。むしろ被造物たるパンとぶどう酒が、言い尽くしえぬ霊の聖化によってかのお方の肉と血の秘跡へと変化するのである。」



## The *Quam oblationem* in the Roman Canon

Jun NISHIWAKI

The history of the textual development of the *Quam oblationem*, a prayer of the Roman Canon, shows how the tradition of a liturgical text is affected by contemporary thought. This prayer was influenced initially by the concept of *λογικὴ θυσία*. In Greek mystical philosophy this concept indicated worship through *λόγος* — the origin of being and the world given to all human beings by God — as well as spiritual offerings to God through praise (*εὐλογία*) and thanksgiving (*εὐχαριστία*), rising out from the heart of the human being. The word *λογικός* appears twice in the NT (Rom 12, 1; 1 Pet 2, 5), in both cases in the context of instructions for Christian living. In the liturgical tradition this was understood to mean that Christians, inspired by the divine Logos, Jesus Christ, the Lord who is the Spirit (2 Cor 3: 17), or the Holy Spirit, make their true offering in the Eucharist; that is to say they express their self-offering through praise (*εὐλογία*) and the Eucharistic gifts of bread and wine, and in this way are united with the once-and-for-all offering of Christ on the cross.

Such theological thought forms the background for the *Quam oblationem*, which beseeches God to receive the believers' self-offering through the Eucharistic gifts. The prayer lost this original meaning relatively early, however, because the keyword of the prayer, *λογικὴ θυσία*, was translated verbatim into Latin as *oblatio rationabilis*.

Furthermore, under the influence of medieval Germanic-Frankish thought with its emphasis on the flesh and the material, the *Quam oblationem* was interpreted as a request for the true transformation of the Eucharistic gifts, just before this transformation occurs in the *Qui pridie*. This interpretation can still be found in a number of Missals in the venacular produced as part of the renewal commissioned by the Second Vatican Council, particularly since the extension of the hands over the gifts, the Epiclesis, was moved from the *Hanc igitur* to this prayer, in line with the *Ordo Missae* (1969) and the *Missale Romanum* (1970).